

山形短期大学民話研究センター資料叢書

さとりのお化け

小国町昔話集 二

編 武 田 正

山形短期大学民話研究センター資料叢書

さとりのお化け

小国町昔話集 二

編 武 田 正

さとりのお化け

小国町昔話集(二)

15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
天保物語	オッテンタカ鳥	テデッポッポ	狐とかわうそ	蟹むかし	猿蟹合戦	ネズミといたちの寄合田	ネズミの嫁	蛇まじない	法印と狐	蛙の法事	天人女房	一寸法師	浦島太郎	さとりのお化け
										— おさん狐 —				

46	43	38	34	31	28	27	24	22	17	14	9	8	6	5
化けもの話	栃の実の化物	二人姉妹	二十四孝	団子どの	ネズミの金搦き	舌切り雀	福の神	下男が賀	医者と鍛冶屋	捨て子	櫛の化けもの	食われた餅	篩借り	トッキ藤兵衛
				— 団子浄土 —	— ネズミ浄土 —						— 和尚と小僧 —	— 和尚と小僧 —		

90	88	85	83	78	77	72	71	66	63	56	54	51	50	48
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31
酒田の本間さま	百子沢	岩見重太郎	首切り役人	阿波の徳島十郎兵衛	石堂丸	菅原道真	紫式部の唄よみ	田の草取り	八月赤子	股大根	人柱の話	西行法師	一休和尚	文福茶釜	山鳥むかし	南の山のおじ	南の山のおじ
(1)																馬鹿聲	馬鹿聲
(2)																馬鹿聲	馬鹿聲

129 127 125 123 120 116 115 114 112 109 107 106 105 104 101 98 95 93

あとがき	まりつき唄・子守唄
139	137
凡 例 一、テープに吹き込んだものを、その語り口のままに表記したものである。 二、昭和四十五年七月に採訪したものに、「文福茶釜」「阿波の徳島十郎兵衛」「首切り役人」の三篇を加えたもので、三篇は川崎氏が自ら語り口どおりに記録されたものである。 三、表記の一部は読み易くするため漢字として、ルビを振ったものもある。 四、昔話の配列は、大体『日本昔話集成』に依り、伝説を最後につけた。	

盆踊り唄

へ花のお精霊さまは

ああ 七日七夜のや

これさ ごしよねがい

ハアドツコイ ドツコイ

(小国町大石沢)

1 天保物語

天保元年ヤカンの年に

近江の湖に火がついて

じんじ ぼんぼと燃えたれば

座頭が見つけて

オッチが火事ぶれ

そのときのいでたちは

六尺の棒をたすきにかけ

三尺手拭杖につぎ

豆腐の足駄で 下駄に青竹すげて

足なしはしり 手なしもみ消した

ナماغロ渡って ミミズのとうげい

ブンヌクとまでさしたり

2 オッテンタカ鳥

むかしあつたけど。兄と弟の兄弟いであつたど。弟は働きものではあ、一生懸命で働いて山さ行つたときなど、山諸掘つてきては、兄んにやええどこ食せて、自分がシナクビの方ばり食つてであつたど。そしてまたいつものより大きなな掘つて来たども、兄、いながつたずも、そんどき。んだども、兄んにやのとこさ大きな残しておくべやと思つて、ええどこ残して、自分はシナクビの方食つていたど。そして兄どつからか帰つてきて、「残しつたぜ」て言うたば、それ食つてはあ、あまりうまいもんだから、

「おれさ、こんなええどこ残して食せるくらいだら、自分がどんなうまいとこ食つたもんだ」

て思つて、殺したずもの。そして腹さいてみたば、ナシクビの悪いとこばっかり食つてであつたど。そうしたば、こんどはあ、神さまに鳥にさつでしまつたど。そしてホトトギスという鳥にさつではあ、八千八声鳴かねば餌もらわねことになつたど。そして、

弟恋しや、オツテンタカ鳥 弟恋しや、オツテンタカ鳥

て、口休める暇もないずなだもの。「オツテンタカ鳥、オツテンタカ鳥」て鳴かなねくて、そして八千八声ないたとき、木の枝さ蛙びつのひつからびたようなもの一つぐらい引つかかつていっことある。おらだ山さ行くど、それがそのホトトギスの餌だなて、教えらつだもんだ。むかしとーびん。

(川崎みさを)

3 テデッポッポ

テデッポッポっていうのは、ソッポな息子、むかし、いでやったど。おっかさんが水汲んで来て呉^くろて言うずど、土など持つて来たりするソッポな息子いでやったずも。そのおっかさん病氣になつたずも。そうすつど、

「とても、おれ死んだら、こんなソッポな者、なじよになるもんだか、困つたごんなもんだ」

て心配しながら、目落しそうになつたど。そして、

「にさ（お前）、まず、おれ死んだら、川端さ埋めて呉^くろよ」

て、こう言うたど。ソッポだから、山の方さ埋めんべちやえと、こう思つて。

そしたば、それ、なんぼソッポ息子でも、親に死なつてみたば、改心したずなんだか、こんど親の言うこと初めて聞いたごんだずも。そしたば川端さ持つて行つて埋めたど。そしたらあるとき、水出れば、そこ欠けて流つて行つたずも。そしたばこんどは雨降りさえすつじど、思い出して、

デデッポッポ　ダダ（母）流った

デデッポッポ　ダダ流った

て泣くようになったけど。むかしとーびん。

（川崎みさを）

4　狐とかわうそ

あるところに、狐とかわうそ、たんと離っでいないで、川の上の山のあたりに、狐住んでいたんだべな。そしてかわうそと行ったり来たり暮しったど。そして毎日、かわうそは雑魚とりあ上手で、取ってきて焙っていっど、狐あ遊びに来て、

「また焙っていたな、昨夜ゆんべなも、採ったな」
て来くつずも。そして、

「ええから食って行げ、おれまた、晩あしたげも取っから」

て、御馳走してやって、

「明日は、ほだら、何かこんど珍らしいもの取ってきて、御馳走すつから、あしたは、おらえさ来て呉くろ」

て言うもんだから、次の日、かわうそ行つて見たずも。そしたば狐はテンコ吹いて、

「狐どの、狐どの、居やったが」

て呼ばつども、決して音立てねずも。

「何だべ、どこ悪わるれんだが、こんなことではなんぼ呼ばつたて駄目だから、戻つて行くべ」

て思つて、かわうそは空戻りしたずも。そしてこんどまたその晩げ、雑魚いっぱい採とつて焙ほつていたば、また狐来たど。

「昨日、おれ行つたども、何きんななんだか上うばり見てて、なんぼ呼ばつても声立てねけあ、どこか悪がつたが、よく治こつて来らつたな」

て言うけあ、

「いやいや、昨日は天守りという病氣に憑がつて、とても音立てらんねがつたがら、明日は何か御馳走作つて待つてつから、どうにでも来て呉くる」

て、

「また今日もはあ、この御馳走、おればり御馳走なつて行んか」

て焙つてだ雑魚みな御馳走になつて行つたど。

そうしてまた次の日、かわうそ行つてみたば、

「狐どの、狐どの、居てやつたか」

て言うど、また音立てねずも。なんだか音立てねど思つて、隙間から見たらば、

こんどは下向いて、さっぱり音立てねずも。

「なんだ、どこか悪わるれか」

て言うども、音立てねから、またかわうそ空戻りしたど。そしたら次の日行つて、

「いやいや、昨日も来て呉くつたような音すつけども、昨日はおれ、地守りに喰じまむ付

がつで、下ばかりほか、見らんね病氣に喰付かつて、音立てらんねがったもの、
申し訳ない、あやまりに来た」

そしてこんど、

「今日も雑魚あつから、食つて行け」

て、はあ、かわうそは狐に御馳走したど。

「よく上手にとるもんだ、こがえにおればり御馳走なていらんねから、こんどお
れも雑魚とり習うかな、なじよにするもんだ」

て言うど。そうすつど、

「感じる晩げ見込んで、夜のええ晩げ、尻尾川さ入っでおいて、そして朝げまで
入っでおけば、感じる晩げだら、誰でもとられるもんだから、そういう風にして
みる」

て、教えらつたずも。そしてええ月夜だし、秋の月夜だから、霜降んべし、今
夜はなんぼ冷だいてええから、我慢してここに居ねんね」

て思つてはあ、尻尾突つこんで夜明けまでいらずも、そうしてこんど、夜明け

たし、行くべと思って、尻尾引張っても、なんぼ引張ってもとれねえし、なんぼ大きな雑魚食つっいだんだか、女魚^{めな}食つっいだんだか、男魚^{かな}食つっいだんだかと思つて、

女魚だか男魚だか エンヤラコンコン

女魚だか男魚だか エンヤラコンコン

で、泣き泣き引張っても取れないずも。そうして取れねから、こんど、

千匹喰つっいたか

万匹喰つっいたか

エンヤラ、コンコン

で、こんどそういうたど。そんでもとれないうちにはあ、近所の野郎ども見つけではあ、「狐だ、狐だ」て、おさえらっただけど。そうして、こんどは唯いじめらつで、しばらく野郎どもに押えらつたから、そんなずるいことはするもんでないど。むかしとーびん。

(高橋しのぶ)

5 蟹むかし

むかしあつたけど。

じさとばさが二人暮しあつたけど。こげな暖かい日であつたべあ、じさは山さ柴背負いに行つて、あまり暑いから、沢さ水飲みに降りだずも。したば、水飲んで休んでいたうちに、蟹出はつて来たから、大きな蟹だから、これ取つてつて、婆さんに喜ばせべえと思つて取つてきて、そして木おろして、

「ばさ、ばさ、蟹とつてきたから、大事に飼つておけよ」

て、そう言うてまた行つたど。そうしたはあ、ばさ、

「何だか蟹はなんぼかうまいもんだということ聞いたども、一ぺんも食べたことないから、じんつあいがないうちに食べても悪いども、まずまた取つて来んべから、おれ食べつかなあ」

て思つてはあ、焼いて食べてしまったずも。そうしてこんど、叱られつど悪いから、まず茶畑さでも、家の前にお茶畑あるも、そこさでも甲羅どこ食つて、甲

羅は、これ食^かれねと聞いっだから、お茶畑の肥料^{こい}にすんべと思つてはあ、埋^{うず}めてしまつたど。そうしてこんど、じさ帰つてきて、

「ばさ、ばさ、今来た、蟹逃がさねようにしつたか」
て、そう言うたば、

「大事に飼つてだ」

て言うども、なんぼ見てもいないずもな、水屋舟さ。おらえの流しさ飼つてたな、なんぼ見てもいないし、困つた、こんでは、

「じんつあ、逃げたようだな、ここさ入つておいたのいないもの」
て。また何だか、美しい鳥、家の前さ飛んできて、

“ 甲羅は茶畑、身はばば食うた食うた ”

て、さえずつこんだど。なんと妙な声立てて、さえずる鳥だと思つて、よつく
聞いだれば、

甲羅は茶畑

身はばば食うた 食うた

てさえずったど。

「はあ、んでは、何だまず食ったは食ったて正直に言いさえすれば、そがえにおどさねに、なして正直にしない」

て、あんまり、こんど叱らったもんだから、こんどは、

「ほんだら、おれ行つて取つてきて、じさ、^な済すから休んで、おれ取りに行んから…」

て、ばさ、ハケゴ下げて行つたずもの、じさまに聞いた沢さ。そして、

蟹コ沢の蟹コヤーい

チヨツコマツコと ホーデコイ

て、石はがしはがし探して行つたば、いっばい出はつてきて、運よく、そしていっばいとつて来てはあ、いっばいとつて来て、そうして、じさと二人で食べせただけ。そしてまた仲直りして、一生むつまじく暮したけど。むかしとーびん。

(高橋しのぶ)

6 猿 蟹 合 戦

むかしあつたけど。

猿と蟹いでやつたずもの。そして蟹が大きなオニギリ拾ったど。そして猿はカキノタネ拾ったずも。そして途中で行き会ったごんだど。そして、猿はそのオニギリ欲しくなつて、

「蟹、蟹、そのオニギリ、カキノタネと取換えねが」
て、こう言うたど。

「これ蒔いておくじど、だんだんに大きくなつて、柿という、うまいな^な実るもんだから、取っ換えねが」

「あんまりええ^{ええ}ごで」

て、取っ換えたごんだど。そして猿のほうあ、喜んでオニギリむしやむしや食べてしまったずも。蟹はそのカキノタネ、自分の家の前さ持つて行つて、土の中さ^い埋けで、そして柄杓で水掛けて、

早く芽を出せ カキノタネ

出さねどハサミで ハサミ切る

て、こう言うては水呉^くつだど。そしたば芽ひよこんと出だずも。

早く木になれ

なんねどハサミで ハサミ切る

て、こう言うてまた水呉^くつで、こんどずんずんその木大きくなつて、柿実^なるようになったもの。そしてこんど、秋になつてはあ、柿、色つき出したど。そして、猿はまた山の上からその柿眺めてで、

「色ついた、降つて行つて、もいで食つて呉^くんなね」

そう思つてはあ、降りて来たもんだど。

「蟹、蟹、あの、いつか取つ換えた柿^なだか、実^なつてだな」

「ほだ、落ちて来たな食うかどて、毎日眺めてた」

て、こう言うた。

「おれ、もいで呉^くつから…」

そして登って行つたど。そしてはあ、おさえて見て、柔やっこいような振りではあ自分ばり食うずもの。

「自分ばり食つてねで、おれつちやも振いでよこして呉くろ」
で、こう言うたずも。

そしたら、あまり赤くもなんねえようないで、鼻はなのこぐつて投げてよこすずも。

「こんな固い食かんねえから、柔やっこいようなどこ呉くろ」
て言うずも。また別な舐めて、尻しつぽの頬などこぐつて投げてよこすずも。

「そんな意地悪しねえで、うまいどこ一つ振いで呉くろ」
で、そう言うど、こんど、

「よしきた」

て振いで、その蟹めがけて投げてよこしたずも。柿固いな投げらつだもんだから、甲羅つぶれてしまったずも。そしたら親は死んでしまったど。それ、子蟹、脇わきで見てて、泣いっただど。猿は持って、たくさんうまいどこ食つて逃げて行つた

ずも。そしてオイオイ泣ிட்டどこさ、臼、ゴロンゴロンと転んできたど。

「はて、なして泣ிட்ட」

て聞いたど。そしたば、

「おらえのおつか、猿に固い柿もいで、ぶつつけらつで、殺さつでしまつたも」
て、こう言うて泣くど。

「よしよし、おれ仇かたきとつてくれつから泣くなよ」

て、こう言うたど。そしてるうちに、蜂ブーンと飛んで来たど。

「蟹、蟹、なして泣ிட்டのであつた」

て聞いたど。

「おらえのおつか、猿に柿ぶつつけらつで、死んだもの」

こう言うど。

「おれも、ほんでは仇とつてやつから泣くなよ」

そしていたどこさ、こんど栗転んできたど。そして栗もその話聞いて、
「んでは、おれも仇とつてくれつから」

て、三人で相談してはあ、家の中さ入ったど。そして猿来る頃だと思つて、栗はこんど炉の中さ隠つであつたど。それから寒い日であつたど。蜂は味噌桶さ隠つであつたど。蟹は、

「お前は流しにいろ」

て、曰教えたど。そして曰は廊下の上さ隠れたど。そしてるうち、猿来たずもの。キチヨ、キチヨてよはあ。そして、

「寒い、火でも、ほげて当んなね」

ぐいぐいとほげつど、栗、バーンとはじけたずもの。

「熱^あぢ、あぢ、あぢ…」

「まず、水でも掛けんなね」

流しに行くど、こんど蟹にはさまつたど。「蟹、はさめよ」て教えたもんだから。

「いや、いたい、いたい、味噌でもつけて」

こんど味噌桶さ行くど、蜂に刺さつたど。

「いや、こんな恐つかない家さいられるもんでない」

て、逃げると、臼、屋根から、ゴロンゴロンゴロン、うんと落ちて、こんど猿さ、とつちめでしたたど。そして「早く来い」て、蟹さん呼ばって、そして猿の首、ハサミではあ、こつ、チョキチョキと切つて、仇とらせだけど。むかしとーびん。

(川崎みさを)

7 ネズミといたちの寄合田

あるところに、わずか離れて、ネズミといたちいだったけど。そしていたちは一生懸命に火野刈^{かの}つてはあ、栗蒔いたずも。そして栗も実入った頃だし、刈つて来つかと思つて行つたば、一本もないずも。

「何だべな。こがえに一本もないわけない。なじよになつたんだか」

なて、

「いま、一どら蒔いたどこあつから、行つてみんべ」

と思つたら、途中に牛寝つだけど。

「牛どの、牛どの、おれ、越前の川原さ栗蒔いたの、一本もない。お刈りやんねか、キチヨキチヨ、お刈りやんねか、キチヨキチヨ」

て言うたば、

「おれ、何知んべやれ、メー」

て言わつたど。牛なんだから……。それからまた一枚の火野さ行つてみたれば、また一本もないど。そしていたば、ネズミ出はつて来たけじゃ、

「おれ、越前の川原さ、栗蒔いたキチヨキチヨ、お刈りやんねが、キチヨキチヨ、お刈りやんねか、キチヨキチヨ」

て言うたば、

「人のものも、ツツー、われのものも、ツツー」

親ネズミ、そう言うてだけど。そのうちに子ネズミ出はつてきたずも。そして、

「ダダ、ダダ（母）、ゆんべなの栗団子食だい」

て言うた。

「ほら見ろ、おみだべや（お前だろう）、おれ、あの難儀して刈ったな、それで搾えた栗団子食たい言うなだべや」

どこさしまつていたって家中さがしてみたば、戸棚、このようなどこさ栗団子いっぱい入っただけど。そしてこんど常づね仲よくないネズミ、なおさら、それでは、いたちとネズミ、一生仲ちがいで暮らしたど。むかしとーびん。

（高橋しのぶ）

8 ネズミの嫁

むかしあつたけど。

あるところに、夫婦のネズミいであつたど。そしてこんど、なんぼかめんごい

女ネズミ生れたずも。そして、

「これはええ娘だから、なんとかして、世界でも偉い者のどこさ呉つでやりたいものだ」

て、あつちこつち聞いて、そしてその挙句、

「いやいや、おれ、ええことみつけた、一番えらいのは、世界中でお日さまだと思ふ。まず、世界中照らすのは、お日さまより偉い者はいないべから、そさ、おれ、まず頼んでみて来つからな」

て、男ネズミ出かけたず。そして行つて、

「お日さま、お日さま、おれ、ええ娘持つてだから、嫁にもらつてもらいたいもんだ」

て。そのうちに雲出てきたずもな。

「おれ、もらいたいことは精一杯だども、おれより偉い者いだ。おれ、なんぼ世界中照らす気になつても、こういう風に黒雲に出られつど、思ふ通りに、とても照らすことでないから、雲に願つた方ええ」

て、そういうたけど。そしてこんど、雲に頼んだら、

「おれより偉いものいた。おれ、なんぼ厚く曇り空にすんべと思つても、風吹いて来られつど、とても一帯の曇り空に出来ないから、風に頼んでみる」

て言うたど。そして風の神さ行つて、こんど、

「風の神、どうかおれの娘、あまりええ娘で、偉い人さ呉れつだいと思つていたら、風にもらつてもらいだいもんだ。息子持つてたら、おらえのな、もらつて呉ろ」

て言うたど。

「おれも、もらいたいども、おれより偉い者いた。おれより偉いのは土手だ。なんぼ平らに強く吹いて行くべと思つても、高い土手あつど、とても平らに吹き渡つこと出来ないから、土手さ行つて頼んでみる」

て言うたけど。そして土手さ行つたらば、

「おれより、偉いものいた。なんぼええ土手築いても、ネズミにかかつては、とても降参だ。あつちこつち穴掘つて崩されつど、土手の形なくなつから、やつぱ

りネズミの娘は、ネズミの息子に呉^くつた方が一番ええから、そうした方がええ。」
て、そう言わつたど。むかしとーびん。

(高橋しのぶ)

9 蛇まじない

蛇、むかしゴウガの山というどこさ、昼眠したごんだど。そうしたら、蛇の敵はナメクジだて。ナメクジにぐるつと取り囲まっでいらずもの、目覚めたば。

「いや、これは困ったごんだ」

と思つているうちに、ワラビ、ニヨキニヨキと出てきたことだけど、それ、ワラビつて育ち早いもんだものなあ、そのワラビ伝つてはあ、蛇、ようやく逃げてあつたど。んだから、蛇恐つかないと思つたら、

蛇よ蛇、ゴウガの山に昼眠して

ワラビの恩を忘れたか

て、そう三度詠んで歩くもんだ、そう教えらっただけな。むかしとーびん。

(川崎みさを)

10 法印と狐 — おさん狐 —

むかしあつたけど。

塞の神にはあ、なかなか利巧な狐いでやったずもの。こんど、むかしは法印さまって、下叶水の、島貫という家ある。そこのじさま、上叶水の家まで毎年二月になつど拌みに来たもんだ。お日待ちに。

「それ、今日はええ空だし、まず二渡戸まで拌みに行って来っかな、お日待ちに行つて来っかな」

て来たずもの。暖ったかい空なんだから、塞の神の橋さ来たば、狐、あんばい

よく出はって昼眠しつたずも。

「そしてはあ、あんまりよく眠ってた、これ、魂消らがして見つかないあ」

と、法印さま、ホラの貝持つてくるもんだからな。狐の耳さ当てて、フウで吹いたとこだ。そうすつどはあ、狐は魂消てはあ、飛び上がって、木立さ入って行つたつけど。そうすつど、

「法印のおれに、あがえに気持ちよく眠でたとこ、あがえに魂消らかしたから、帰りに仇とつて来んなねと思つてはあ、そしてこんど、二渡戸を、お日待終して戻つて行つた。まだ二時頃であつたべ、お昼終して戻つて行つたずも。そして行つたばはあ、塞の神さ、いまちいというたば、暗くなつたずも。

「何だかなあ、道もそがえに悪くないけあ、こがえに早く暗くなつて、まず、なしておれ、こがえに手間どつてもんなんだか」

と思つて、

「暗くなつたし、どこかまず、誰か提灯でも点けて来ねかと思つて見たば、向うに火のあかり見えつしな、義雄おどつたあ灯りだべから、まず提灯でも借りつか」

て寄ったずもの。

「こんばんわ」

て言うたば、「はい」なて、義雄おどつつあ、

「いまごろ行かねで、おら家さ泊って行け」

なて、言うずもの。

「ほんだらは泊めてもらって行くか、おらえの人、そがえに案じてもえんめえから、二渡戸とここの間だから、ほだら泊めてもらう」

て入ったずも。そしたばこんど、夕飯は御馳走になつたし、こんど「湯さ入れ」て言わつて、こんど湯もらつて、そしてええ心持ちで入っていたど。そうしてこんど入っていたば、自分の家族の島貫の家では、

「おらえのじんつあ、泊ったことなて、めつたにない、どうでも帰る」

て来たなに、来ないな何だこんどと思つて心配して探ねに來たずも。そしてこんど義雄おどつつあ、家ではえええあんに湯さ入って來た氣で、法印さまはいたずし、そうしたば、こんど、

「じんつあ、こんなとこにいて、ほら、いまちいとで死ぬとこであつた、川の中にいたでえ」

なて、呼ばらつたずもの。ほうしたば、塞の神の橋の下さ、狐に仇とらつて川端さゆらつでだんであつたけど。それからこんな賢い狐さは決していたずらさんねと思つてはあ、まず家さ行つて、そんな話してはあ、そしてまず風邪も引かねように、家の人に温めらつて過したけど。むかしとーびん。

(高橋しのぶ)

11 蛙の法事 — 蛙女房 —

むかしあつたけど。

一人ものの男いだどこさ、あるとき、見かけのええ女、
「おれば、おかたにしてくんねえか」

なて来てあつたど。

「あんまりええぜ」

なて、そしてはあ、一緒になつたど。したらある日、

「おれ、親の法事だから、行つて来つから」

て、こつと言わずも。

「お法事だら、家さ何か持つて行かなねごで」

て言うたど。

「いや、何もいらね」

て、こつと言うて行くずも。

「何だ、法事にいらねなて、おかしいもんだな」

と思つて、後追かけて行つて見たど。そしたらば、こんど何だか山の方さ行くずも。それからこんど、ずつと氣付かねように追かけて行つたば、沼コあんなさ、チャポンと飛び込んでしまつたど。そうして高いところから見つだば、こんどあつちからも来、こつちからも集まりして、蛙いっぱい集まつてはあ、真中に大きな

蛙一人いで、ヂコヂコ、ヂコヂコと始まったごんだずもの。

「しゃ、何だべ、おれあ、蛙はおかたにしまったんであったべか、一ついたずらして呉れんべ」

と思つて、石拾つて真中の大きな蛙の頭めがけて投げてやつたずもの。そうすつど、あんばいよくぶつつかつたずもの、頭さ。そうすつど一時にみな鳴き止んでしまつたど。いや、親父、大氣もみして家さ来て、知しやねふりしつたごつたど。そしたら晩方、おかたはあ、何だか面色も本当でなく歸つて来たど。そして今度は、

「御法事はなじよであつた」

て聞いたど。「今歸つてきた」て来たもんだから、

「いやいや、今日の御法事は^{おお}大台なしであつた。和尚さまの頭さ、石どつかから飛んできて、ぶつつかつたもんだから、御法事は台なしであつた」

「あの蛙、和尚さまか」

と、こう言うてしまつたずも。そしたばこんど、

「いやいや、そういう風に、おれ、正体見破らっではいらんね。暇呉っでおくや
い」

てはあ、出て行ってしまったど。むかしとーびん。

(川崎みさを)

12 天人女房

むかしあつたけど。

あるとき、若い衆ら稼ぎに行つて浜辺通り掛つたら、きれいな着物、松の木の枝さかかつてあつずもの。それからこんど二枚も三枚もあつども。それから一番きれいなようなな、と思つてふところさねじ込んで知しやねふりして、藪の中さ隠つて見っただど。そしたば水浴びしつた女衆、あがつて来たずもの、三人だか四人も上がつて来たな、一人の女は、その着物ないもんだから、ほら、着ること

きないずも。そして探していっども、ないもんだし、

「早く行かねば行かんねくなるから、お前探して来い、おらだ行ってるから」

て、着物のある人はそれ着てはあ、みな天さ舞い上がって行ってしまったど。

ほしてはあ、着物のないな、うずくまって泣き出したずもの。そうすつど、藪からその男出て、

「なして泣く」

なて、知しやねふりしていたど。そしたらこういわけで着物なくて、おれ、

家さ帰らんねて、そういうたど。

「ほだら、まず、おらえさ歩えべ、何か着るものあんべから」

なて、連つでったごんだど。そしてこんどはあ、羽衣見付けらんねように、戸棚の隅すまこの方さ突込んで、自分の衣裳など出して、着せておいたど。そして帰らんねて言うし、

「仕方ないから、ほだら、まずおれ、おかたになっていねが」

て、そういうて騙して、おかたにして置いたど。そしてそのうちに、男の子ど

も生れだずもの。そしてその子ども、いたずらするようになってから、そこら引つかき廻したば、羽衣見つけて引張り出したごだずも。

「おかちや、おかちや、こんなきれいなものあるわ」

て、こう言うど。

「いやいや、これはおれの大事なもんだ。どこにあったや」

戸棚の隅すまこの方にあつたぐらいなこと教えたべちや。

「ほんでは、おれ、これあれば天さ帰られる。おれは天の人間ななであつた」
て。

「お前は、おどつつあと二人で、ここの家で暮せよ。おれは天さ行くから」
て、親父、また働きに行つたその間に、子どもによく言い聞かせて、

「もしや、おれにまた会いたくなつたら、この夕顔の種子呉つて行くから、これ蒔いて馬の沓百足拾つて、肥料こやしにしるよ、そうしつど天まで登つて来られつから」

そう言うて教えて行つたど。むかしはカナグツなんて出ないうち、藁で作つた沓はかせておいたものだど。馬に。それ百足肥料にしるて教えて行つたど。そし

てこんどはあ、野郎こ、行がっでしまったもんだから、泣いっただわけだど。夕方親父どの帰ってきて、

「なして泣いっだ」

て言うた。

「おら、かあちゃん、ほだたて、おれ、ここほげだら出はってきた衣裳着て、天さのぼってつてしまった。ほして、おれに会いだくなったら、この夕顔の種子蒔いて、馬の沓百足肥料にすれば、会われっからな、来られるからな」

て、そういうて教えて行つたつて、こ言うど。それからこんど、親父もはあ、こんど「そうすつこで」て、夕顔の種子蒔いて、見つけど馬の沓一生懸命で拾つて来たもんだど。九十九足になったど。ほだども、あと一足ないつたて行かれんべ、ほら、うぶされ」

て、野郎こば背負^ぶつて夕顔のぼって行つたど。そうして登^{のぼ}って行つたところがいまちいとして、天さ届かねこんだずも。そして九十九足で届かねで、

「んでは、ここから、しゃなってみるか、おっか、やーい」

て、野郎こはしやなつたわけだ。そしたば来たど。ほだども、

「約束通り、もう一足たんねくて、天さ届かねなだから、お前だは人間の世界で暮さねことになつてた定めだべから、ここから戻つて呉^くろ」

て、顔見ただけではあ、

「今日は戻つてもらわねね、約束を破らんねもんだぞ」

て教えらつではあ、親父もはあ、それ聞かせらつて、あきらめて、そこから子どもつれて戻つてあつたど。天と地の人間はやつぱり別に暮さんなねがつたんだけど。むかしとーびん。

(川崎みさを)

13 一寸法師

むかしあつたけど。

おじいさんとおばあさんいたけど。子ども持たなくて、まず、鎮守さまさ願かけて、

「子ども一人、ちっちゃな子ども一人欲しいもんだ」

て、こう願かけしたずもの。そして生れたば、ほんにちっちゃいな生れてしまつたずも。

「仕方ないから、ばあ、一寸法師だ、こんなものは、欲しい欲しい」

てばり言つてたど。そしたればやっぱり十五六才にもなつても、ちっちゃいもんでだずも。

「ほだども、じんつあ、ばんつあ、おれ京の方さ行つてみたいと思う。そしたばおれみたいな者でも、何とかなるかも知んねえから」

て。そしてこんど、

「お椀の舟に、箸の櫂で十分だ」

て、そして出かけたごんだど。京さ。そして京都さついて、そして公家さまの玄関さ行つたど。そういうどこさ勤めたら何か勉強もされんべと思つて。そして

公家さまの方さ行くべと思つたら、雨降つて来たごんだずも。そしてこんど唐傘さして立つてる人いた。その足駄の下さ入っていたごんだど。そしてこんど「もしもし」で、こう言うたど。

「何だか声するようだ」

と思つて、その人見つども、人いねず。そしたらこんど、

「誰だ、おれを呼ぶるな」

て聞いたど。

「足駄の下からだ」

こう言うずも。それから、ふんづけねようにそうつと足ずらしてみたらば、ちつちやな子ども、なるほど足駄の下にいでやつたど。

「おやおや、本当だ。お前はどこから来た」

て言うたば、

「この川上から来たもんだ」
て、

「んだども、体小さいども、京に行ったら何か勉強でるとかと思つて来たども、お公家さまの屋敷さでも勤めて勉強したいと思うども、お公家の屋敷教えてもらいたい」

て、こう言うたど。そしたら、

「おれも公家だ」

て。

「ほだら、おら家の屋敷さ勤めるか」

て、こう言うたど。

「勤めると言うより、お前、こんな小さいもんでは、姫の遊び相手だごで」

て、こう言うたど。そして連れて帰つたど。そしてお姫さまに、

「何か勉強でも教えてやれ」

て、お姫さまの遊び相手になつていたど。そしていたら、

「今日はまず、桜見につれて行くから…」

て、そして京の清水さつれて行くのに、タモトさ入れて行つたど。そして見に

行つたところが、人も大勢いるな、こんど鬼が現われたごんだずもの。そしてこんど、お姫さまあんまり美しいもんだから、さらう氣になつたど。そうすつど、法師がタモトから飛び出て、その鬼さ、針の刀さしてであつたど。それで鬼の目さ、ジヨキジヨキと突いたずもの。登つて行つて。鬼もこうはらうべと思うども、小さいもんだから、どこにいたも分んねえずも。鼻の穴を突ついたり、目を突ついたりするもんだから、お姫さまは放す。大事な打出の小槌まではあ、落して逃げて行つてしまつたど、鬼。そしてお姫さま助かつて、その打出の小槌拾つて、法師、

「これ、打出の小槌つて、何でも思うことかなうそうだから、お前も大きな人になられつか、一つ振ってみるか」

て、そうしてこんど振つたど。

「一寸法師、大きくなれ」

て。ズンと大きくなつたずもの。

「もう少し大きくなれ」

ズンと大きくなつたど。そして丁度ええ若衆になつたずうもんだ。そしてこんどはあ、お公家さまのお屋敷さ歸つたど。そしていろいろな勉強教えてもらつて利巧な者だから、そのお姫さまのお髻さんになつてやつたけど。むかしとーびん。

(川崎みさを)

14 浦島太郎

むかしあつたど。

ある日、太郎と名付いた人が、浜辺さ行つたど。そしたば子どもら集まつて、亀おさえていじめつたど。結^ゆつけて引つ張つたりして。

「こらこら、にさだ、むごさいから、その亀いじめねで、おれに売んねが」

て。むかしのごんだから、一銭か五銭に買ったわけだべもの。そしてこんど、放してやつたど。なんぼか釣りの好きな人で、そしてまた釣りに行つたど。そし

たら大きな亀現われて、

「あの、浦島さん、浦島さん、おれはいつか助けてもらった亀だから、その礼に竜宮さ御案内すつから、おれの背中さのつて呉ろ」

て、そう言うずも。そして太郎は喜んで、そんなところさ連れでつてもらわれるなんて、仕合せだと思つてのつたど。そしたば波越え水の中くぐつて、連れて行がったど。そうして行つたところが美しい御門のそこさ着いたごつたずも。そしたらさまざまなお姫さまがお迎えに出て呉つて、

「よく来ておくやつた」

てはあ、喜んでその御殿さ上げてもらつたど。そして、

「オトヒメサマという人さ会わせつから…」

て、オトヒメサマという人の前さ連れて行がったことだど。そしたば、オトヒメサマも大変喜んで、そして、

「人間なんていう人に会われた」

て、大変御馳走呉つてはあ、踊り踊らせたり、その侍女たちに。毎日の御馳走

して呉れたごんだずも。あんまりそういうこと毎日してもらったば、退屈して飽きてしまったど。そして、

「オトヒメサマ、おれも大抵にして家さ帰りたいから、家さ帰して呉ろ」

て願ったど。そしたら、

「何にもお土産呉れることは出来ねえから、この玉手箱呉つてやつから、これによほどのことない限りは開けないように、このまま持つてろよ」

て、そういうてもらつて来たど。そしてまたその亀、迎えに来て呉つだもんだから、のせてもらつて自分の家さ帰ったど。そして自分の家さ帰ったつもりだども、自分の家さがしても見当んねがったずもの。隣近所聞いてみんべと想うても、誰も、

「そんな浦島太郎なんて、この村にいでやったべか」
て言うずなだも。

「何だべ、ここのようだが、おれの生れたどこは…」
て想つて探してみれば、山や川はそうなようだども、人はみな別なようだずも。

そしてあんまりさびしいし、何入ったもんだかと思って、その蓋^{ふた}とってみたど。
そしたば煙ポーツと出てきてはあ、自分の髪、白髪のおじいさんに、煙でなつて
しまつて。そしてはあ、ますます誰にも分なくなつてしまつてあつたけど。三
年だと思つて暮しつたども、三百年にもなつていたんだけど。むかしとーびん。

（川崎みさを）

15 さとりのお化け

むかしあつたけど。

炭焼おやじ、夜、山で退屈なもんだし、このような風に、ただいても、もつた
いないと思つて、『カンジキ曲げ』しつたど。——カンジキつて知つてござんべー。
そして一生懸命曲げてたば、旅人あ来たらずもな。「こんばんわ」て来たなだ。
「こんな山の中さな、なんだべます。何かの化けたものには相違ないな」

と、こう思ったど。

「ほう、なんだ、おやじ、おれば何かに化けたんだと思ったべ」と、こういうものだ。

「いよいよもって、これは化けもんだ」
そう思ったど。

「いや、やつぱり、いよいよもって、化けもんだと思ったな」

こう言うものだ。そのうちにおやじも恐つかなくなって来たもんだから、ちと太めのカンジキ曲げつだな、手はずして、ピンと跳ねたずも。そうすつど、その旅人どこさ、太つとい方飛んで行って、その鼻柱のあたりピンとはじいてしまつたど。そうしたば、キャーッと逃げて行つたど。鼻血たらしたらし。まあそうする気でないぐしたもんだから、悟れねえがつたそうだ。そうして夜明けてから、
「やれやれ、ええがつた」

と思つて、血たらした後たどつてみたど。そしたば雪の上さポタポタと垂^たつてだ血^{たど}辿つて行つてみたら、穴あつたど。そして村の衆頼^たんで行つて掘つてみたば、

古ぼけたムジナであつたど。それする氣でなくしたもんだから、ふいに急所やらつで、うなつていたどこ、捕ら^とつただけど。むかしとーびん。

(川崎みさを)

16 化けもの話

むかしあつたけど。

毎晩げ、おらえのあたりのような鎮守さまで、踊りみたいな音すつずも。で、それからこんど、何騒やかにしてるもんだべと思つて、そうつと行つてみたど。そうしたら、さまざまな者、集^{あつ}ばつて踊つてたどであつたど。

デツツクバツカ スツカツカ

ニヤオニヤオにコンコンコン

このことかまえて 鎌倉の

カンマン太郎に聞かせんな、ハア

デツクバツカ スツカツカ

ニヤオニヤオにコンコンコン

このことかまえて 鎌倉の

カンマン太郎に聞かせんな

繰返し、くりかえし、毎晩げ踊っこんだど。それから、そのカンマン太郎じゃ何のこんだべと思つて調べてみたれば、鎌倉になんぽか大きな犬いたなであつたど。それに聞かせられれば、おれたち、来て集^{あつ}ばつて踊ることもでないから、その、聞かせたくない。それを文句にして獣たち呼び合つて楽しんでいたのであつたけど。むかしとーびん。

(川崎みさを)

17 栃の実の化物

むかしあつたけど。

隣のとうちやんみたいに、牛の好きな人、肥出こいだししつたずも。そしたら、前川の方で、「トテー、トテー」て音すつど。なんなもんだべと思って、肥出こいしカギかつたまま、行つてみたど。そしたば、蚊が栃の実、目玉さ入つではあ、取らんねくて、「トテー、トテー」て泣いっだつたど。ど、とうちやんが肥出しカギで栃の実、ぐいっと取つて呉つたど。そしたら、蚊がカンブルデル・カンカーンと飛んで行つたけど。むかしとーびん。

(川崎みさを)

18 二人姉妹

むかしあつたけど。

ある村に、夫婦で、そして女の子ばり二人もつてあつたけど。姉の方はなんぼかきれいで、ええ娘で、妹の方はあんまりきれいでなかったど。そしてこんど、「こんなきれいな娘もつて、こわい仕事だの汚ない仕事だの通したくないから、何か楽しく暮されるようなええどきやりたいもんだ」

て、母親は願つて、その姉ばかりきれいにしておいだし、父親は、

「見かけ悪いとも、氣立てやさしいから、姉は嫁にやっても、この妹は家で働かせて、妹に養ってもらう」

て、そういう気ではあ、妹は一生懸命で父親はめんごがつているうちに、こんど殿さまの息子だという若殿さま、大勢の家来つれて、旅であつたずもの。そして、そこ通りかかつて、

「その、若殿さま、喉乾わかしたから、水呉くつでくろ」

て、家來の人入って來たど。そんとき、みな働きに出はつて、その姉妹一人んどきであつたど。それからこんど、その人もそう言うんだし、

「おれだつて水ぐらい呉くつじやて差支えないべから」

て、まず、家にある一番きれいなコップ出して水汲んでやつたば、

「いま一杯、御馳走してもらいたい」

て、また入つて來て、二杯御馳走になつて、そして行つたば、その殿さまも何ぼかきれいな殿さまであつたども、その娘見つけたど。その殿さまも歸つてから、その娘ば忘れらんねことだど。それば欲しくなつて、こんどあちに手廻し、こつちに手廻し、もらいに來たど。んだから、母親はまず願つてもないこと、そんなきれいな立派な若殿さま、あらえの娘呉むれられつこんだら、仕合せだと思つて、そして母と娘は大喜び、まずそこさ嫁むかさつて行つたごんだど。んだども、何年も経もよつても、うんとめごがつて呉くれつども、口聞かねごんだどな。言葉一つ掛けねど。

「異なごんなもんだ」

と思つていたば、こんど、その母親に聞いてみたば、

「おらえの息子は、見かけは一人前に出たども、喋れなく生まれたなだ」

そう言うずも。困ったどさ来たども仕方ない。来てしまつたしと思つていううちに、自分もなんぼかきれいな男の子生んだど。それもまずまず、めんごくでめんごくで、仕様ない。笑うようにもなり、立つようにもなり、歩くようにもなりして、さつぱり口聞かねずもの。そしてこんど、そのこと親衆さ教えてよこしたば、「見かけばりでないもんだ、ほに。おらえんな見かけええから、見かけええどさ呉つでなと思つて呉つではあ、間ちがいであつた」

て、母親は言う。父親は妹は氣立てやさしいから、なるたけええ聲見つけたいと思つていううちに、うんと稼ぐええ聲見つけて…。

こんど姉の方、くやんだで追つつかねども、妹の方は素直な聲の稼ぐなもらつて、そして二人で一生懸命稼いで、親は養つてはあ、親は一生安樂に通したけがらはあ、見かけなど悪くとも、正直は一生の宝だと思つてはあ、親衆も、妹ば一生懸命寵愛して、安樂にすごしたけど。むかしとーびん。

19 二十四孝

むかしあつたけど。

一人の親孝行な息子、毎日、仕事に行つて帰りには酒買つて来い^き来い^きしたど。
父親、酒好きなごんだから。そしてある日、働き少なくてはあ、酒買つて来ら^ん
ねがつたど。そしてヒサゴ（フクベン）持つて行くな^だども、

「困つたこれ、酒買えば、米買わんねし、今日は稼ぎ少なくて…」

と思つて来たらば、滝どんどん、どんどんと流れでる滝の傍まで来て考えたご^ん
んだど。

「この水、酒だつたら、どんなに仕合せなんだかなあ、まず仕方ない水でも一回
飲んでみつか」

と思つて飲んだ。そしたば酒の味すつずもの。

「いや、これは神さまのお授けだ」

と思つてはあ、そのフクベンさ水汲んで来たど。そして「おどつつあ、今帰つたぜ」て、そしてそれ飲ませてみたらば、やっぱり酒であつた。

「いや、今までにない、うまい酒、にさ買つてきて呉くつたなあ」

て、喜んで飲んだずも。そしてはあ、それ憶えて毎日のはあ、

「これ、あしたも汲んでも酒なんだかなあ」

と、次の日も行つて汲んでみたば、やっぱり酒だずも。そしてはあ、毎日上がりにその酒買うので、滝の水汲んでくるもんだから、暮しも楽になつて、父親もええフトンも着られるようになってはあ、仕合せに父親ばも安樂させて死なせてやつたけど。むかしとーびん。

(川崎みさを)

20 団子どの ― 団子浄土 ―

むかしあつたけど。

おじいさんとおばあさんといで、ばさまは流しではあ、朝の御馳走づくり、じさまはお庭掃いたど。そしたら大きな穂一本落ちてたど。むかしは穂一本でも粗末にしねがったもんだから、

「ほう、もつたいない、もつたいない。ばさ、ばさ、こんな大きな穂一本拾ったから、まずこれ搗いて団子でも^{こしや}拵え」

て、こう言うたど。そしてこんど、その穂むしつてはあ、団子に作つたど。一つほかて出ないがったど。まず上げろつて、お仏さまさ上げたことだど。お仏さまにネズミ穴あつて、そさコロコロんと、まぐれて入ってしまったごんだど。

「おやおや、こんど、ネズミ穴などあつたんだな」

て、じさま、その穴、こんど辿つて団子さがしたごんだど。そしたばずうつと縁の下から軒場の方通つて、大きな穴開いっただずもの。それからこんど追かけて

行つたど。そしたば団子コロコンと転ぶず、

団子どの 団子どの どこまでござる

新座の宮のコケラ葺きの お堂の石地藏の前まで

て、また「団子どの、団子どの、どこまでござる」「新座の宮のコケラ葺きのお堂の石地藏の前まで」て。それから行つてみたば、なるほど石地藏立つてござつたずも。

「地藏さま、地藏さま、団子来ねがったべか」

こいうたど。

「あまり、うまそうな団子一つ転んで来たけがらはあ、食つてしまった」
ていうずも。

「やれやれ、おれもやつと穂一本見つけて拵えた団子ななであつたけども」
て、こいうたけど。

「ほんでは、まず仕様ないから、食つてしまつたけがら、お前に何も札の仕様もない。おれどこさ鬼ども集まつてバクチ打ちするから、今夜はおらえさ泊れ」

て、

「その鬼どもの金でも持たせてやつから」

て、こう言うたど。そして、

「この屋根裏さ隠つで、ニワトリの真似しろ」

て、こう言うて教えたど。そうすつと、地藏さまのうしろの方から、屋根裏さ登ったごんだど。そしていたば、夜になったか、こんど来たずうもの、赤鬼に黒鬼に、青鬼に…。

「なんだ、地藏さま、地藏さま、人くさいでないか」
て来たど。

「人なんていねんだぜ」
て、こう言うたど。

「いや、何だか人くさい」

て言うど、「人など来ない」「ほだか」。そうして丁だ、半だて始めたど。ほうし
ているうちに大抵、一番トリええかなあと思つて、板ば。パタ。パタ、パタ。パタ。パタ。コケ

コーて言うたど。

「ほう、何時の一刻なもんだなあ、ほら一番ドリ鳴いたぞ」

そして、いまちいと経うずど、パタパタ、パタパタ、コケコー。

「はあ、二番ドリだ、さあ夜明けっから、この金などしまってる暇ない。地藏さま、また来っからはあ、このまま行くぞ」

て、みんな行っってしまったど。

そしたば、地藏さま、

「じさま、じさま、降りてこい。みな鬼共、金置いて行っただから、早くこれ持っ
て家さ帰れ」

て、そうしてはあ、それもらって家さ帰ったど。そしてばさまにそれ見せった
ど。そうしたら、隣のばさま来たずも。

「おみたち、こらほどの金、なじよしてもうけてやった」

「いや、おらえのじさま、団子一つさ追かけて行っ、地藏さまにもらって来た
ど」

て、こう教えたど。そしたば、

「ほんでは、おらえのじさま、のらくらと何もしないでいつから、団子でも拵こぎえて、んではおらえのじさまもやんなね」

て、そして家さ行つて、まず米櫃あちこち集めれば、一つ拵えたごんだど。そうしてその穴さ入つてやったども、仲々まくれねずも。んだども、じさまゴロゴロとはあ、転ばし転ばし行つたど。そして行つて、地藏さまやっぱし立つてござつたど。

「地藏さま、団子来ないがつたべか」

「いや、来たけ、そら、そこにある」

つうずもな。

「ほだども、今頃来たでは、お前帰らんねべから、おらえさ泊れ、そしてこんど、鬼共きてバクチ打ちするから、この天井裏さ隠つてで、ニワトリの真似しろ、そうせば鬼共帰るから」

ていうて、やっぱり教えたど。そしてそのじさまも登つていたど。そうすつど

また鬼共来た。

「フンフン、やっぱり何だか昨夜ゆんべなから、地藏さま、人くさいな
こう言うど。

「そんなはずないどもな」

て、

「何だて、昨夜な頼んで行つた金もないし、おかしいぞ」
と言うど、

「いやいや、そんな、人など来ないども、お前だ考え違いだべや」
て言うたど。そしてそのうちに、

「ほだか」

また始めたど。そうするどはあ、じさ、ええ頃だと思つてはあ、「コケコ」な
てはあ、言うたど。

「何だか、今夜のトリは下手なようなトリだども、一番トリだな」
なて、やつていっずもの。ほうして、つうと（少し）もようど、また鳴いたど。

「二番トリだ。夜明ける、さあ早く帰んねねで、まず、あの金また頼んで行く」
て言うど、じさま喜んで、ケラケラと笑ったそう。

「そら見ろ、地藏さま、人いたから…」

つうもんで、「そら探せ」て言うもんで、探さつてしまった。そうしてこんどはあ、引っぱり落さつてはあ、

「おれあ頭食う、おれあ足食う、いや、おれは背中の方だ」

なんてはあ、みんなではあ、あっち刺し、こつと裂きして食つてしまったけど。
ばさまは待てど暮らせど、じさま帰つて来ながつたで、そしてはあ、ばさまもさ
びしく過ぎてやったけど。んだから人の真似なのするもんでないけど。むかしとー
びん。

(川崎みさを)

21 ネズミの金搗き ― ネズミ浄土 ―

むかし、大判小判、毎日毎日、ネズミ金搗きすつど。そして干す^ほごんだど。稲場さ。―稲場で、むかし莫産織るために菅干^{すが}したんだど。―そして、じさ、菅刈^かって干しに行ってみたば、何だか異な音すつずも。そしてこんどトントン、トントンというし、よく聞いたば、

ストン トン

百十になるまで 猫の音聞きたくない

ストン トン

て、大きなネズミ、何か搗く音すつじもの。ガチガチって…。そのうちに搗いたのは、一生懸命で片端さネズミ運んで行って、そのじさ、菅干した向うの方さ並べつだど。それでまた、

ストン トン

百十になるまで 猫の音聞きたくない

ストトン トントン

て搗いで、いっぱい搗いた金、稲場の片端にひろげたずも。それから、これ、猫の音聞きたくないつうもの、猫ば恐つかなくてだべと思つて、猫の真似してみつかと思つて、じさ、ニャオニャオて言うたずも。

「はあ、猫来た」

つうもんで、その金しまわねで、みな隠つてしまつたど。それからさあ、そのじさ、みなさらつて来てはあ、家さ来て、ばさと何か買つたり、きれいにして、お菓子でも買つて、お茶のみしたじだがな。そさ、隣のばさ来たずも。

「何と、こらほどの御馳走買つて、そがえに家もきれいにして、どつからまず金、求めやつた」

したば、

「おらえのじさ、あの菅刈つて干しに行つたば、片端で『猫の音聞きたくない』て、トントンていう音すつから、よつく聞いったら、『百十になるまで猫の音聞きたくない、ストトン、トントン』て金搗きしつたけあ、それこんど、猫の真似し

たば、みなネズミ金ひろげたまま、穴さ入ってしまったから、さらって来た」
て教えたば、

「ほんでは、おらえのじさまも、やんなね。毎日休んでばりいつから…」
なて、

「じんつあ、じんつあ、隣のじんつあなどネズミ、金干したな、さらって来たつて、いっぱい何か買ってきて、御馳走したけがら、おらえのじんつあも行つてまず菅の二三把も干して、その金、さらうように、稲場くさ行つてきて呉くろ」
なて言うたずもの。そして行つたば、やつぱり、

ストトン トント

百十になるまで 猫の音聞きたくない

ストトン トント

て、また搗くど。片端のみな喰わえて行つて、干しほし、いっぱい並べたど。そしてこんど並べた。また干すのあったべども、じさはあ、とてもこたえでいらんねで、杉の木の上さ、片端の上さあがって、小便たっだずも。下りでの暇なくて。

「さあ、雨降ってきた、さあ、雨降ってきた」

て言うてだけあ、みな金、しまつてしまつたど。

「ぬれないうちにしまえ」

なて。んだからずるくして人の真似するもんでないけど。むかしとーびん。

(高橋しのぶ)

22 舌切り雀

むかしあつたけど。

じんつあとはんつあど、いでやつたど。そしてじんつあは柴切りに行く、ばさ
まはせつせと継ぎものしたり、糊つけたり、働いであつたど。そうしてある日、
じさま、雀こ一羽とつてきたずも。そしてはあ子ども持たないんだし、大事に籠
さ飼つて育てておいたどこ、籠から出て餌呉つても逃げて行かなくなつたど。そ

してある日、

「ばさ、ばさ、雀の餌忘れんなよ」

て、また山さ行つたど。そして外さ出して遊ばせて、ばさま、ええ空だし、糊つけすんべと思つて、糊拵えておいて、そしてこんど、ばさま布地見てるうちに、雀糊なめたもんだじも。そしてうまいもんだから、あらましなめてしまつたど。それ、ばさま見つけて、こんど、

「なんだこの野郎、にさか、舐めたな。待て待て、そんな悪いことする。舌など切つて呉れっから」

てハサミでチョツキリ、先の方切らつてしまつたごんだずも。そして、
「どさでも行け」

なんて飛ばしてやつたど。そしてはあ、鳴き鳴きとんで行つた夕方、こんど、じさま歸つてきたどさ、いねもんだど、めんごは…。そうすつど、

「ばさ、ばさ、めんごはどうした」

「おれ、糊付けすんべと思つて、拵つた糊舐めたから、舌切つて飛ばしてやつた」

と言うど。

「やれやれ、可哀そうなこと、そんなでは、おれ探しに行つて来んなね」
て、そして、

「どっちの方さ飛ばしてやった」

「そっちの方だ」

なんて言うもんだから、そっちの方さ行つたど。疲れて来たもんだから、杖棒
ついで、

舌切り雀 お宿はどこだ

舌切り雀 お宿はどこだ

て行つたば、竹やぶあつたど。そうしたば、いっぱいいっばいの雀がチュンチュン、チュ
ンチュンチュンチュンて出てきて、

「おじいさん、よく来て呉つた。めんごのお宿はここだから、寄つて呉ろ」
て言うずもの。そして寄つたらば、

「その舌もよつぽどよくなつた。痛みもとれた」

ていうずも。そして、

「ええ・じんつあだから、みんな御馳走してくろ」

てはあ、御馳走して、雀踊りなど見せてはあ、御馳走なつたど。そして、「泊ま
れ」て泊めてもらつて、「帰つて行く」て言うたらば、

「お土産くれる。大きなツヅラええか、軽いちっちゃいツヅラええか」
て言うたら、

「年いって、重たい大きなもの、背負わんねから、ちいさいな呉ろ」

て、そう言うたど。そして貰つて来て、家さ来て、こんど、

「ばさ、ばさ、雀の家さ泊つてきた。そしてこういうお土産もらつてきた。何は
いったか開けて見っだい」

て開けたど。中から絹の着物だの、さまさま軽いものなどはあ、いっぱい出て
きたど。ええもの。そうしたば、ばさま、

「ほんでは、おれも行つてみて来んなね」

て、次の日こんど、ばさま行つたごんだど、そしたばあまり出迎えでも呉んね

がったじども、「よく来た」ぐらいなこと言うたべちやえ、そしてばさまも御馳走になって来るといふたど。泊れて言わんねんだから、夕方来るといふたど。

「お土産くれる。大きい重たいツヅラええか、小さいツヅラええか」

「力持ちだから、重たいなええ」

て言うずもの。そして大きなもらつて背負つて来たずも。途中まで来たらあんまり重たいし、開けてみたごんだど。そしたば、蛇だの百足だの蜂だの、いっばい出はつてはあ、ばさまば刺すやら喰付くやらしたごんだど。ばさ、切ながつて泣き泣き家さ帰つてきたど。血だら真赤になつて。じさ、夕方、飯炊いて食う頃だと思つて眺めたば、向うの方から赤いぐなつてはあなあ、音すつずも。あんな赤い衣裳もらつて唄などうたつて来たぜと、こう思つていたど。そうしたば血だら真赤になつて、泣き泣き来たなであつたど。そして、

「なんだ、まず、ばさま」

て言うたら、

「いやいや、これこれであつた」

と言うたど。んだから慾かいだり、あんな小さい者の舌など切るもんでないぜつて、じさまに悟さつたど。むかしとーびん。

(川崎みさを)

23 福の神

むかしあつたけど。

あるとき、福の神さまが、そこらのええ家を覗き見して歩つたど。そしてある家の夕飯時であつたど。今のように電器釜などない、鍋で炊く時代なもんだから、御飯煮立おままつて来つど、そっちふくれ上まはしがったり、こっちふくれ上まはしがったりするもんだから、飯箸でかきならすわけだ。

そしてこんど、どの程度柔らかいか固いか調べるなな、それ、こんど一人のおかみさんは、はさんで一粒の御飯つぶしてみて、また元の鍋にもどしたど。そし

て隣家さ行つて、また見たど。そしたば、そこのおかみさんは箸でやってだな、一粒とつて、フニヤフニヤと食べてしまつたど。

「こんな不精な家さは立ち寄らんね」

て、さつきのつぶして返した家さ寄んなねつて、神さまはその家さ寄つてあつたど。んだから、たとえ人いねつても、不精なことするもんでないど。むかしとーびん。びったりさんすけ釜の蓋、灰で磨けばええ銀玉、ナア、さんすけふんはい。

(川崎みさを)

24 下男が聳

むかしあつたけど。

ある旦那さま、何不自由なく、その、長者さまって言われるようなとこだとも、たつた娘一人ほかいながつたど。ほして何ぼか、それも器量よしの利巧な娘で、

あつちからもこつちからも聾心配されつども、どつから心配さつても、いらねいらねって、決してもらわねずも。それからこんど、そこに段々身上もよくなる、財産もいっぱいあつて、稼ぎ人もいっぱい頼まんねなだから、大勢若衆のんで稼いでもらつていた中さ、たつた一人、何ぼか不器用な汚ない人、

「おれば、釜たきでもええから、おれば使つてもらいたい」

という人來たずもの。

「ええから、若衆仲間もいっぱいあつから、いてくろ」

て頼んだど。そしてこんどいるうちに、娘、便所さ起きてみたらば、汚ない釜の火たき、おら家で頼んだ、どんなことしてるもんなんだか、部屋の中さ、ちよいと便所さ行くととき、覗^{のぞ}つてみたば、きれいな湯上り出して着て、きれいな男いたずもの。なんだべまず、昼間いるも、傍さ寄るも嫌^やんだような人が、あんなことになるなんて、狐の化物でもあんだか何だかと思つて、そして朝げになれば真つ黒になつて、いや働くわ働くわ、正直で一生懸命働いて、家の人はお気に入りだども、見かけは見らんね男だずも。そしてまた、夜も早くから様子見てくれんべ

と思つて、娘のぞつて見たらば、湯から上つて来て、一生懸命に白い鳥の羽根みたいな、顔撫でつだけど。そうしたば、またきれいな白い顔になって、ええ男になつたじし、こんど、朝げに見て呉れんべと思つて、朝げに覗つてみたらば、黒い鳥の羽根みたいなもの出して、こう顔さ黒いもの塗りだくつてつこんだずもの。そうしてこんど、一生懸命で働いて、毎日のように、仲人は諸所方々から来るども決して、もらうて言わねし、その娘はそれば見込んでしまつたずもの。そして、「どんなな欲しいなだ、なんぼええどつからもらいに來て呉つども、もらわねし、困つたもんだな」

と思つて、いるうちに、風邪ひいたなて、寝て、こんどなんぼ薬飲めて言うても、ろくに飲まね。うまいもの拵えてくれても、食べなくてやせて行くていうずも。「困つたもんだ。まず、医者に見てもらえれば格別病氣もないようだというども、食も進まねば、あんなことになつて」

と思つて、そしてこんど、

「どこ悪わるれなだ」

てよ。母親、まず、誰もいないところで聞いたど。

「誰か別に欲しい人でも出たなだか」

「おら、釜の火焚きじさまば、よくよく聳に欲しくなった」
て言うずも。

「あんなものもらつて、格好も年寄りだし、まずあの顔もらつたて、じきに明日で嫌やんだくなんねか」

て言うたら、

「決して嫌んだくなんねから、もらつて呉くろ」

て言うど。そしてこんど、

「どんなどこええ」

て言うたら、みな母親に包みかくさずに、母親に話したど。そしてこんど、

「お前、まず、おらえさ聳になつて呉くろ」

て言うた。

「おれような、こんなまず、体だて腰も曲つた形の悪いもんだし、器量もこのよ

うに炭焼き権兵衛ていうよりまだわるい。ここの家の簀になんて、とてもなられる身でない」

て言うども、娘は聞かねんだし、

「本当は、おらえの娘、こういふとこ見たなだというから、まず湯から上つてきれいにしして、そしておれにも見せて呉^くろ」

てな。そしてこんど毎日頼まれるもんだから、そのようにして、正物見せたらば、番頭仲間も魂消^{おほ}で、みんな大氣^{おほ}に入りになつて、こんどもらつて、一生懸命働いて、身上はあがる、子どもも出るで、両親^{おや}も喜んで、一生安樂に過したけど。むかしとーびん。

(高橋しのぶ)

25 医者と鍛冶屋

むかしあつたけど。

お医者さんと鍛冶屋と一緒に死んだごんだど。そしてはあ、道づれになつて、三途の川や、あれを通り抜けて行つたど。そしてらこんど、閻魔大王さまに、

「お前たちは生きてるうちに人さまのためにもなつたべども、金も大變にとつたもんだから、唯など成仏させらんね」

て、そしてこんど、あれだずもの。

「槍の山登れ」

て、こう言わつたごんだずも。そして鍛冶屋、一晩げのうちに金のワラジ作つてしまつたど。そしてお医者さんと二人、金のワラジ拵えて、その槍の山登つたど。

「これは困つた人、これでは仕様ないから、煮立湯さでも入れる他ないな」
と、こう思つたど。それからこんど、釜さお湯わかつて、そさ入れることにし

たど。そうすつど、ええお医者であつたべちやえ、体中塗つじど、火傷のしない薬持えたごんだど。そうしてはあ、お医者さまと鍛冶屋は、それ塗つてお湯さ入つたごんだずも。そしたば、さつぱり火傷もしないでケロッと入つていづも。いや、こんでは仕様ない、

「お前だは、やつぱり、世の中さええことしたせいでそうなんだべから、成仏させろはあ」

て、そう言わつであつたけど。むかしとーびん。

(川崎みさを)

26 捨て子

むかしあつたけど。

山の中の部落で、あまり田もたんとなくて、とても百姓ばりでは暮さんねで、

その部落は女衆は百姓して男衆は炭焼きで暮したどこだっけど。そしてその炭焼きも大勢あったべも、毎日、三人仲間で行くのは、若衆は清作という人で、年いったのは太郎兵衛に太左エ門という者であつたど。そして清作という人は歩き方も早いもんだから、毎朝早く登り上がって一服して、

「早く来い、早く来い」

て、年寄衆ば、よばって行きついて、そしてみんなと登り上げつど、一服のんで炭焼きいしいしいつたなだど。そして次の日も清作早く行つて、

「早く来い、早く来い」

て言うから、

「よに、清作、早く登りついて退屈して呼ばるな」

て行つたら、なんだかいつもより氣もんで、

「異なもの落っこつていたから、早く来い、早く来い」

て言うずもの。そうして行つたば、

「どこさ」て言うたば、

「ここの橋のたもとさ、きれいなもの落っこつていたから、来てみる」

と言うども、そして行つたば、本にきれいなみがきのようなエジコさ、小袖さくるまつたオボコ投^ながつていだなあつたど。

「誰捨てたもんなんだか、これ、昨日^{きん}暗くなるまで、おら、いたどもないな。今朝になつて誰か投げて行つたのに相違ない」

と思つて、そしてこんど太郎兵衛も清作も子どもあつたども、太左エ門という人だけは子どもなかつたど。

「おらはあ、子どもあつどこさ、こんなものつれて行つたて、とても育てらんねから、太左エ門、子ども持たねもの、そつちの家さ持つてつて育てろ」

と、そう言うずもの。

「ほんだら、おらえでつれでつても、かかにおんつあれあしまいから、おれ拾つていんから…」

て。そして何ぼかきれいな子であつたど。大事にしてエジコのまま持つてきたずもの。そしたばはあ、ばさま喜んで、毎日毎日、栄養あるもの飲^{おが}ませて育て、

そしてこんど、

「晚げはまずお早く風呂沸かして、入っでみつかなあ、なんぼめんごいんだか」
そして二人がかりでエジコから出して衣裳ぬがせてみたらば、絹や小袖でくるまつて、そして一重ねの絹布の着物きせでいたんであつたど。そのタモトから、何だかフアーツとしたもの出てきたから見たらば、

「この子ども拾った人は、決して粗末にすんな、されるだけ大事に育てること」
そういう書きものであつたど。そして、

「こりや、何者だか、そう書いてあつから、されるだけ大事に育てねえ」

て、育てつだば、六つにも七つにもなつてはあ、なんぼか育ればおが育るほど男の子であつたし、男ぶりもよくなる。偉いものの子どもだもと見えてはあ、品もそなわつたええ息子になつたずも。

そしたば、こんど、代官さまさ、

「あるとき、こう、子ども橋のたもとさ置いて来たな、拾つて育てた者あるに相違ないから、それ育てた者は、またもらいもどしたいから、決して、いや応なし

に返せ」

て、書いたもの配ったであつたど。そしてこんど代官さまからの達しなんだし、その太左エ門というところで育てたということ聞いて、そこさ来たもんだから、なんぼめんごいったつて、いたましいつたつて、やんねで置かんねから、ほだらまず、あの、入つてだなの一番ええ衣裳着せて、そして飾つて眺めてからやつかて、二人でこの衣裳させてそしてはあ、粗末な家だども、床の間みたいなどこさ飾つたば、もらいに来たらずもの、大勢で。そしてその頃で、銭五百円呉つて行つたずだか、それからこんど、

「これ、今までの育て賃だから、この子に掛かり切りで育てて呉つだべども、もらつて行くのだから、年入つてもこれあれば通して行かれつから、この金ではあ、あきらめて呉ろはあ」

て、その人は大金置いて、連れて行つたど。そしたば清作も、

「おれ見つけたなだから、こつちの家さばり金もらつてもらつてはいらんねがら」
て言うんだし、ほだら、仲間三人分けして、三分の二は隣の人さやつから、分

けて呉ればええだし、あとはおれ、もらうから、その子育てたおかげで、その金で夫婦安樂に一生通したけど。むかしとーびん。

(高橋しのぶ)

27 櫛の化けもの — 和尚と小僧 —

むかしあったけど。

ある山中のお寺に、小僧一人と和尚さまいたけど。そして、今のうちに何も無いものないんだし、和尚さま、いそがしくない時、小僧つれて行って、いっぱい木の実(ブナの実)拾ってきて、そして自分、用達しに行くときは、

「木の実、食べてろよ」

て、あずけて行ったずも。そしてこんど、遠いところ行ったとき、和尚さま、帰り遅くなったら、囲炉裡の隅から細い手出して、

「小僧、小僧、木の実呉ろ」

て言うずも。恐つかないから、「ほら」て呉れつど、それ食べてしまつて、また、ちいと模様見てつど、

「小僧、小僧、まつと呉ろ」

て、また手出すじも。そして、

「小僧、小僧、木の実呉ろ、もつとないか」

て、また手出つではあ、小僧は二つ三つ食べたばりではあ、なくなつてしまつたずも。

「これは恐つかないもんだ。早く和尚さま来ればええ」

と思つて、こんど和尚さま帰つて来るのを待ちで、その話したど。

「それは、おれ、夢見たんだべから、こんどそんな事あんまいから、夜、いま一晩げ、おれ遅くなつども、我慢して留守番してろ、今夜いっぱい木の実呉つて行んがら……」

て、そしてこんどその前の晩げの倍も木の実もらつて、また留守番したら、

また暗くなのなつど、

「小僧、小僧、木の実呉ろ」

て、細い腕出してよこすずもの。

「そんなわけないどもなあ」

「んだて、和尚さま、おれ、夢でない、この隅から出した」

て言うものなあ、それから二人で掘ってみたど。ほうしたらば、ずっと昔の古い歯欠け櫛出てあつたけど。櫛の化物であつたけど。むかしとーびん。

(高橋しのぶ)

28 食われた餅 — 和尚と小僧 —

むかしあつたけど。和尚さんと小僧二人いでやつたど。そして和尚さん、餅他所よそからもらつて来たども、

「こりや小僧に呉れっど、おれ、腹一杯食^かんねもの、土尾の方に、何か見せもの来たずから、そこさやって、それからおれ焙^ほつて食うべ」

て、そう思つて、

「小僧、小僧、にさだ二人ではあ、今日土尾さ遊びに行つて来い、暇くれっから」
て、出してやったど。と、小僧だちも餅もらつたこと知つてたもんだから、

「こりや、和尚さま、おら、いね後に食う気であんめえか」

そう思つたど。そしてまず、そこらまで行つて、ちいと油売つて、和尚さま焙り出したような頃、もどつて来たど。そして下相談したずもの。

「お前、先に声かけろ、おれこの節穴から和尚さまどさ隠すか、見てっから」

こう相談して、そして節穴から一人の小僧はのぞこんでいたど。ちがいない。

和尚さま焙つていたそうだ、ワタシさ。そうすつど、一人の小僧、

「和尚さま、和尚さま、今来た」

て、廊下で声掛けたど。

「いや、早く来らつた」

と思つて、和尚さま氣いもんで、囲炉裡の灰あくほげて、そさ、みなフクレ餅埋めてしまつたど。そしてそれ、節穴から見つた小僧、こんど廊下さ行つて、

「こういう風にしたわ」

て、教えたど、別な小僧に。そして二人で入つて行つたど。

「ひどい早く来たな、にさだどんなこと見て来たや」
て。

「面白いなけから来たはあ、和尚さま」

「ほんだら、どんなもんだけ」

そうすつど、小僧たち二人で火箸つかんだずも。

「こんなこと、したけなあ」

て、囲炉裡突ついたら、みな餅、火箸さ刺さつて来てしまつたど。そうして小僧たちにみな食わつであつたど。ほだから、食い意地などしないで、小僧にも分けて食せれば、和尚さまも食くつてあつたども、みな小僧に食かつてあつたけど。
むかしとーびん。

29 篩ふるい 借 り

むかしあつたけど。

じさとばさ、二人暮しの家あつたけど。今日、じさは早く起きて、お庭掃きしつたれば大きな豆拾つてはあ、

「ばさ、ばさ、まずこんな大きな豆拾つてきた。これ半分に割つても生えおそうな豆だから、半分残して種子にして、半分で黄粉拵えて呉ろ」

なて言うたずも。そして半分割つてしまつて、半分、茶ほうじで煎つてはあ、黄粉はたいだ。そしたば、

「あんまり、篩、切つてではあ、役立たねから、まず隣のばっちゃんにでも借つて来い」

なて、

「いやいや、隣の家さ行けば、隣のなも食^くたいなて来るもの、駄目だごで」
なて。

「いやいや、上の家だつて、黄粉餅だて言う^くと、珍らしいがつて、食^くたいて来る
ど悪いから、ええから、おれフンドシの端でふるえ」

なて、じさ、フンドシの端でふるつてだずも。そうすつどそいつよりも大きな
屁出たど。そうすつじど、黄粉みなとんで行つてはあ、向いの山の笹葉やら何か
さ喰付いたど。そしてはあ、こんどあたり近所の子ども、

「おれは、餅焙つて持つて行く」

隣のは、笹巻もつて行く、団子もつて行くてはあ、あたり近所の子ども、みな
持つて行つてはあ、向い山の笹さ喰付いたのつけて、

「じんじの屁の実、うまいぞ」

て、喜んで食つたけど。むかしとーびん。

(高橋しのぶ)

30 トツキ藤兵衛

むかしあつたけど。ある村に若衆大勢いて、みな稼ぐ村であつたけども、藤兵衛という若衆一人いであつたど。稼ぐことは稼ぐども、あんまり気早やで『トツキ藤兵衛』という名、あだ名もらつたけど。そうしてこんど、また朝げ早く起きて、

「おっか、今朝、馬で草刈りに行つてくつから馬に飼餌かいばして、率かれるようにして呉ろよ」

なて、自分齒みがいったりするうちに、母親に頼んだずも。そして母親は馬にいっぱいもの食せかで、出口さつないで、

「家の前さつないだから、いつでも率いて行がれつから、行つてもええぜ」

なて言わつではあ、率っぱつて行つたど。そしてずっと、山草刈つて来んべと思つて、坂上あがりかけたずも。今朝の馬大人しくて、さっぱり声立てねどて、あれだと思つて振り返し見たれば、コタツヤグラ引いて来つたずも。

「おら家のおっか、まず、錠口さつないんだからって言うけあ、そっから持つてきたな、コタツヤグラだ」

なて、ブンブンて怒って、

「なんだ、おっか、おれにコタツヤグラ率かせてやって…」
なて、

「藤兵衛、間違つて率いて行つたんだごで。おれ、ほら、そこさつないだんでや。馬。鞍まで掛けておいだでや」

そしたば、その脇さ馬はリンとしていであつたど。それからこんどはあ、

「遅くなつたから、おにぎりして呉^けろ、弁当もつて行んから、そして、遅くまで掛がんべから、おっかだは朝飯終して呉^くれつどええべから、おにぎり持つて行つて来つから…」

おっかは握り飯にぎつて、そして、

「上り口さ出して置つから、これ持つて行げよ」

こんど、

「漬物、暖かいから漬け直ししなねし……」

なて、おっかは漬物つけに騒いだ。藤兵衛はまた行つたずも。こんど馬率いて行つて、握り飯食べて帰んべと思つて見たば、石だずもな。

「なんだべ、おっか、こんな石、おれにあずけて、腹空^すきて仕様ないに……」

またはあ、行つて、かかつて呉れんべと思つて、ブンブンと来て、あまり氣もんできて、隣の家さ入つて、

「何だ、おっか、おれにおにぎりだなんて、騙して漬物石だけぞ」
なんて怒つて入つて来たずもの。

「何語る藤兵衛。まずお前の家であんまえ、隣のおっかだぜ、おれは」
というから、顔見たら、隣の家さ入つていたど。

「ああ、申訳ないことした。ほんでは悪かった、おれは。あんまりトツキなせいだから、氣付けつから、まず許して呉^くろ」

なて、隣のおっかさ謝まつて、それから今後はあ、何事も、おれはあんまりトツキなせいだから、落付いてしなね、と思つて、それからこんど、心を入れかえて

落付いてするようになったば、何にも間違ひもなく、村でも評判な、稼ぐええ若衆になつて、一生安樂にはあ、奥さんもらつて、子ども出て暮したけど。むかしとーびん。

(高橋しのぶ)

31 南の山のおじ — 馬鹿聲 — (1)

むかしあつたけど。南の山のおじあ、正月礼に嫁の家さ行つて、数の子出さつて、あんまりうまいから、手づかみして数の子食つたど。そうして小便たれ行つてさわつたもんだから、かゆくならなかつたもの。そしたば、かかに、

「かゆくならなかつたもんだから、洗わねえなあ」
て、

「枕元にヤカンさ水汲んで来てあるもの、それで洗え」

て言わつた。それで洗っているうちに、ふやけてしまつて、取れなくなつてしまつた。でも。

「これは困つたことになった。取れなくなった」

朝げになつても取れねえ。仕方ないから、ヤカンぶら下げて起きて来た。そして飯御馳走になつて後、親父、

「あまり退屈だから、将棋さしでもすつか、兄んや」

と言つた。そして「あまりええ」て、さしてゐるうちに、何の気なしに、

「センキカエツポは抜けねどせ」

て、さした。思はずな。そうすつと、じさま、

「裏の清水で冷やせどせ」

と言つた。舅親父はさした。

「はあ、それはとれつか」

と、そう思つて、

「おどつあま、おどつあま、おれ、ちいと用達して来つから」

そう言うて、裏の方さ廻って行ってみたば、冷ひやっこい清水あつたど。そさ、ま
ず、のだばつて冷ひやしたど。そしたば冷ひやっこいもんだから、縮んでしまつて取れで
あつたど。んだから、そんな不精はするもんでないど。むかしとーびん。

(川崎みさを)

32 南の山のおじ — 馬鹿聲 — (2)

南の山のおじはあ、里前から嫁もらつたけど。そうしてこんど、正月札に行つ
たらば、数の子の御馳走出たけど。そしてこんど、うまく御馳走になつているう
ちにはあ、仲人さまも氣あ出て、そして一緒に泊つて、夜中になつてから目覚め
て、おかたに、

「さつきだ、あの、御馳走になつた、あの、皿さついだプリプリというもの、う
まいもんだけあ、あれ、まっと食たいな」

て言うたど。

「おら、夜中に寒くてやんだから、行つて流しのところの瓶さ入つていたから、食べて来んだ」

て言うたずもの、おかた。そうすつどノサノサとはあ、夜中に入つて行つて、食べて、そしてしまいに、あまりうまくてはあ、大きな瓶だもの、かぶついて食うべと思つて頭突つこんで、そして食べたずも。そしたば、取らんねくなつてはあ、カメカブリになつてしまつて、とても寢床さも行かんねし、いまちいとで夜明ける、まず便所でも行つて来んべと思つて、便所さ行つて、そしてあまり粗相な便所であつたべどや、萱囲いの、そしてかけ前さ行つていたば、また誰か来た音すつずものな、便所さ。それからこんど、見つけらんねようにと思つて、かげ前さ隠つていたば、おらえの家のような便所であつたかなんだか、あの、お尻ふくものなかつたど。そしてこんど、見つたらば、その垂つた人がすませてから、石、脇にあんなの、石で拭いたごんだど。そしてこんど、汚ないから投げてやつたずも。そうすつど運よくその南の山のおじ、かぶつてた瓶さ石当つたど。そして割れて、

おかげで取れたど。そうして帰つて来て、まず寝て、起きて朝飯のとき、「あまりこれ、嫁も聳も来たし、おれ仲人したし、嬉しいから謡出すかな」て、謡い歌つたずも。「めでたいどこ唄う」て…。

池のみぎわの ツルカメは…

て歌つたど。そうしたれば、その聳は鶴と名付いた人であつたど。自分のこと言わつたと思つて、こんど数の子、そのプリプリ食つたこと教えられつど大変だと思つて、

「にしゃ、ほんだら、石で尻けつ、石で尻けつ…」

て言うたけど。そして語つてみたれば、

「んだば、その仲人ちゆうにんさんが、石で尻拭つて、瓶さその石当てて、おれのかぶつた瓶をば取れて、あとから大笑いの座敷になつたけど。むかしとーびん。

(高橋しのぶ)

33 山鳥むかし

じさま早く起きて、戸の口払いと言うてな、ここで戸の出入口さいって、そして道踏みしつたずも。そしたば向いの山から山鳥とんで来たずも。

「ああ、とんできた、とんできた、おれどさとんでくればええ」

て思っているうちに、じいさん踏んでだすぐ先さ来て、くたさつでしまったずも。あんまり吹きに迷つてか、酔えたかして…。

「はあ、ええがった。これはおれのさ授いたなだ」

て思つて、砂掃きで叩いて持つて来たど。

「ばさ、ばさ、今朝はええもの取つてきた、道踏みしつた丁度先さ山鳥きて、ぶつついたから、取つて来たから、おれ、橋の雪も落して来ねねから、毛ひいて、おれ入るまでに煮ておけ」

て、そう言うて行つたど。そしてはあ、あんまり深雪あんなばいなんだから、じさ、あんまり手間どるうちにはあ、山鳥できてしまつて、ばさ、塩梅見しつたば、うまく

てうまくて、こたえらんねで、一皿食い二皿食い、はあ、一鍋みな食ってしまった。そうしつどはあ、

「何として、これ、じさに言いわけしたらええんだかなあ、その代りするようなものもないし……」

と思つていたじに、猫ニャアと来たから、飼つてた猫むごさいようでもあつども、仕様ないと思つて、猫のチンチコの半分とばばのぺっぺ半分煮たど。そしてこんど、

「ばさ、ばさ、今朝は雪ふかくて、ひどかった。やつと今終おやしてきた。山鳥煮たか」

「煮た煮た、煮すぎたくらいなつてはあ、こげくさいような匂いする」
なて、ばさ煮つたずま。こんど鉢さ入つで、食つてだけざあ、

「何だか匂いのするような山鳥であつたなあ、お前も食え」
なんて言つてたど。

「おれあ腹病やめて食んね」

て、食ねがったど。そうすつど、家の前の掛竿さ美しい鳥飛んできて、

「しないし、くさいし、うまくない山鳥だ」

なて言うていたば、

しないも　くさいも　道理だ

猫のチンチコの片割れ

ばんばペッタの片割れ

こう言うてさえずつずも。

「なんだ、異^いなこと語んな、ばさ」

て言うど、ばさ、気掛りで追うずも。そうすつどまた飛んできて、

「しないもくさいも道理だ、猫のチンチコの片割れ、ばんばペッタの片割れ」

て、そう言うずも。そうしてこんど、ばさ、

「本当は、じんつあ、悪れがった、おれあうまくてはあ、みな食つてしまつて、

仕様なくてはあ、言いわけに猫ば殺して、そして猫の肉煮てだなだから、勘弁し

て呉^くろ」

て、そう言うたけど。そう言うて、ばさ、平らになつて願わつだもんだから、じさもたんと怒んねで仲よく暮したけど。むかしとーびん。

(高橋しのぶ)

34 文 福 茶 釜

むかしあつたけど。

あるところに屑物を買ったり売ったりする一人ものの男がいて、ある夕方、山道を家にいそぐ途中、一匹の狸がワナにかかり苦しんでるのを見て、

「おお、可哀そうに」

と、ワナからはずしてやつたけど。そして家さ帰り、寝て、朝また出かけようと思つたら、籠の中に自分が買った憶えのない茶釜が一つあつたけど。男はびっくりして、

「こんな立派な茶釜、はてどこで買ったけなあ」

て、いくら考えても思い出せないが、とにかく、おれの簞にあるもの、おれのもんだべから、よしよし、隣村の和尚さんが、こういうものが好きだから、て持つて行ったら、とても喜んで買ってくれたど。そして和尚さんは、お茶を立ててみようと思ひ、小僧さんによく洗つて水を入れて来るように言うたど。小僧さんは「ハイ」つて、水屋に持つて行つて、灰をた^{あく}つぷりつけて、ごしごし洗い出したど。そしたら、釜が、

「小僧、小僧、いたいから、そつととげ小僧」

といったので、小僧おどろいて、

「和尚さん、これはなんだか氣持わるくて、あまり砥^とがんだい」

て、あちこち洗つて水入れて持つて行つて火に掛けたど。そうしたら、こんどは熱くなつたので、頭は出す、尻尾^{しりぽ}は出すで、「あちち、あちち」と逃げ出したど。

和尚さんも小僧さんも、いやはや驚き、早く早くと追いかけたが、とうとう逃がしてしまつたど。

狸は狸でおどろいて、こんなところにいるのは、殺されっからと、また夜になってから、屑屋さんどころに行き、寝てる枕元でこう言うたど。

「とてもあんな恐つかないう寺にいらんないから、もどつてきたから、あしたは村の衆を集めてくれ、そうしたら、おれ、綱渡りしてみせっから」

て言つたど。屑屋さんはその通りにして、家に綱を張り、自分は扇子などひろげて、

「さあさ、みなさん、文福茶釜の綱渡り」

などと、おどけた格好ではやしたら、みな喜んで、沢山お金をおいて、また見物に来るよ、なんて、とても大喜びをされ、男も屑屋をやめて、よいお嫁さんをもらい、一生安泰に暮したつけど。

畜生でも恩は知つてるもんだけど。むかしとーびん。さんすけびつたり釜のふた、灰で磨けばええ銀玉、なあ、さんすけふんはい。

(川崎みさを)

35 一休和尚

むかしあつたけど。

ふざけたところのある和尚さんで、一休和尚さんという和尚さんであつたけど。
お正月にな、門松立てたり、めでたいな、してつどき、シャレコーベ、棒の先さ
つつかけて、江戸の町の中、

正月は冥途の旅の一里塚

めでたくもあり めでたくもなし

なんて、大声で歩き歩きするような、すねた和尚さんであつたけど。むかしとー
びん。

(川崎みさを)

36 西行法師

西行法師、旅して歩くとき、いまちいとで向うの部落見えつから、あそこまで行きたいと思うども、とつてもウシコ出て、我慢でなくなつて、そして山の上で便垂つたずも。そしてこんど終して、尻拭いて、脇さよけんべと思つたば、ピンと萩の上さ出たな知しやねで、そして、

「はあ、これは失敗した」

と思つて、その萩見て、

西行はいかなる旅もしてみたが

萩のはね糞　これは初なり

て、歌を詠んだずも。

(高橋しのぶ)

37 人柱の話

むかしあつたけど。

むかしは今とちがつて、百姓衆は水に困つど、堤というもの拵えたもんだど。あるところに大きな堤拵うべと思つたども、土手つくど崩れ、つくどはあ、崩れするごんだずもな。

「これは何か人柱でも立てなければ、駄目なのだと、おれ、人柱立てることにすつだい」

て、その名主さまはこう言うたど。

「そんでは、まず、誰ば立ててええていうもんでないから、今日来つた人の着物のうちで、横継ぎにつがつていた人は、人柱にすつから」

て、名主さま、そう言うたど。そうして、みんなの着物しらべたど。タツケやら、そしたば、名主さまの袴さ、横継ぎがつてたど。自分が言い出したもんだから、仕方なくて、名主さまがその堤の人柱になつて、そしてはあ、無事にその

堤もできあがってあったど。んだから、男の着物さは横継ぎはつぐもんじゃないど。むかしとーびん。

(川崎みさを)

38 股 大 根

お大黒さまという人は、何ぼか餅の好きな人であつたずも。そしてあるとき、招ばれて行つて、あんまり餅食つたもんだから、腹せつなくてはあ、うんうんうなつて寝てたごんだど。そうしたば大根売りのおつか通り掛つたど。

「おいおい、おい、大根一本ゆずつて呉ろ」
て、寝てて、さなつたど。

「いやいや、今日のなは、注文でとてもゆずらんね」
て言うたど。

「そう言わねで、おれああんまり餅、昨日食^{きな}ったば、今日も切なくてとても起きらんねとこだから、どうか一本呉^くつておくやい」

て、こう言うたど。んだども、見てたけざあ、

「いやいや、二股大根あるから、そうせば本数は何本と約束してきたなだから、呉^くれらんねども、この二股大根さいで、ほんだら呉^くつて行くから」

て、二股大根さいで食^くつて、その大黒さまが大変よくなつて治つてあつたど。

生命拾^{ひろ}ひしたど。んだから、大黒さまは二股大根、そのために子供えするもんだけど。むかしとーびん。

(川崎みさを)

むかしあつたけど。

お腹大きくなつて、八月にもなつて、いまにも生みそうになつて出掛けたもんだから、山の中まで行ったら、腹、急に病めてきて、炭小屋のような小屋見つけて、うんうんと、腹痛めてうなつていたど。そしたら侍通りかかつて、

「近頃買った、新身あらみの一刀で、試切りしてみる」

て、そしてはあ、その苦しんでいるそのおつかさんば、その新身の刀で切つたつてなだ。そうすつど中まで切れないで、腹の皮まで切れて、そうしてその人は、
「おお、切れる切れる」

なて、行つてしまつたど。そうすつど、その傷口から赤子が顔出して、オギヤオギヤと泣いていたど。

それ、むかし、ワラジ履きで道中したもんだど。砥屋藤左エ門という人が通りかかつたど。なんだもんだか、小屋の中で赤子の泣き声するから入つてみたら、

女の人のお腹切られて、その傷口から赤子が出て、オギャオギャ泣いてだど。

「可哀そうに、まず、親は何とも仕様ないから、子どもだけ育ててやんべ」

て、そう思つて、その男の腕で子ども取り上げたような形にして、つれて行つたど。家さ。そして「お捨て」と名付けて、こんど育てておいて、よっぽど大きくなつてから、

「お前はこうした素性の子どもだ」

て言うこと教えたど。そうして、

「おれは刀の砥師だから、いずれその刀持った侍、来るかも知れない」

て、こう言うて教えて育てて来たど。ほしたら段々に大きくなつて、

「憎い親の仇とつてくんね」

て、その子はそう思つてたど。そしたらある時、やつぱり相当の年配になつた侍が、刀砥ぎ頼みに来たちゆうなだもの。そしたら、少し刃こぼれあつたどな、刀に。そしたら来る人毎に、藤左エ門という人は調べるために、その刀はどうしたわけ、ここに傷付いたことの、どうのこうのと話しながら、砥ぎ砥ぎしてだ

なだど。したら、その侍言うには、

「この刃こぼれは、昔、山道通りかかって、炭小屋のようなところで、大きな腹したかか、腹痛みしてたのを始めて買ったとき、試切りしたときの刃こぼれ、今だに残っていんなだど。できたば、これも取るように砥いでもらいたい」

て、こう言うたど。それ、カゲの部屋で聞いてだ子どもの『お捨て』は、今にも飛びかかんべと思つたども、藤左エ門に目くばせさつて、まずやめて置いたど。そしてその刀砥いで、こんどあんまり切れなく砥いで呉つたわけだ。次の日になつて役人さ届けて、そして藤左エ門さんが助けだちして、親の仇とらせて呉つてやつたけど。むかしとーびん。

(川崎みさを)

40 田の草取り

むかしあつたけど。

越後に大百姓いでやつたど。そしてこんど、大百姓なもんだから、田も大きな田ばかり持つてであつたど。若衆もいっぱい置く。そしてはあ、秋になつど、どうもその田の真中ごろええぐないもんだずも。それから、その旦那、あるとき田の草取んねで、ぐるりばかり取つてだなであつたど。

「いや、これでは困った」

ど。そう思つてある日、こんど五升樽背負つて行つたど。そしてこんど、田の真中さ五升樽置いて来たこんだど。そして若衆上つて来たど。

「にさだ、どこそこの大田、田の草取ったか」

て、こう言うて聞いたど。

「取つたぜ、旦那さま」

て、こう言うずもの。

「何か変ったことなかったか」て聞いたずも。「何もなかったな」て言うずも。「ほ
だらええし。明日いま一ぺんその田の草取つてみねか」て、こう言うたど。若衆、
「異なこと言う、おらだ真中取んねがったこと悟らつだかな」と思つて、「今日は
仕方ないから、まず真中まで取つか」て、みんなで取つて行つたど。そしたら五
升樽一本立つてあつたど。そうして、こんどは田の草とつて、夕方それ持つて来
たど。

「いや、旦那さま、申訳なかった。実は真中の田の草とんねでだであつた。今日
は取つたば、五升樽あつた」

て、そう言うど。

「それ、お前だ真中まで丁寧にとつた御褒美に、おれ置いたなだから、お前だ、
今夜飲め」

て、そう言わつて、若衆喜んで飲む、それから若衆も改心して、仕事は粗末に
しないようになって、ますます大百姓になつてあつたけど。むかしとーびん。

(川崎みさを)

41 紫式部の唄よみ

むかしあつたけど。

むかし宮中で歌の会、ときどきあつたど。あるとき、紫式部という方が、なんぼか上手歌よんだど。そしたら朋輩衆に、

「お前の母親は歌の名人だもの、これは母親に聞いた歌だべ」

て、そう言わつたど。そしたら、紫式部は残念で、あの係の方が自分の前通るとき、お袖をおさえて唄よんだど。

大江山　いく野の道の遠ければ

まだすみを見ず　天の橋立

て、おかあさんが遠いとこにいてやつたど。そんでそんな見る余裕なかったつて、そういう歌であつたど。むかしとーびん。

(川崎みさを)

42 菅原道真

むかし、菅原道真公に、親は伯大夫という人に、三人の男の兄弟いでやったつて。梅王丸に松王丸に桜丸。それがこんど、梅王丸は、道真公がどこかへ流されるとき、自分の身の危険をさったもんだか、自分の身かくしてしまったもんだ。そのとき、松王丸はこう歌よんだ。桜丸は腹切つて死んだのだ。

桜は枯るる世の中に

何とて松のつれなかるらん

て、そう歌よんで、自分も腹切つて死ぬなだも、その前に道真公の子ども、自分の子ども身代りにするなであつた。寺小屋さ上げるとき、松王丸の奥方は、「千金、二千金、三千世界の宝の里、教える人に習う子ら」

て、そう言つて、寺小屋さ、わが子あげであつた。そしてこんど道真公の子どもおさえて、殺されるということになったとき、その子どもをかくして、我が子を道真公の身代りにして、首にして差し出した。そしてこんど我が子もそ

ういう風にしたもんだから、松王丸も辞世の歌のこして、自分も死んであつたけど。

(川崎みさを)

43 石 堂 丸

むかしあつたけど。

むかし、加藤左エ門資氏という人あ、侍はどうも人を殺したり、出世や何かで、いろいろのことで、嫌^やんだくなつたど。

「おれは世を捨てて、和尚さまになりたい」

と、こう思つてはあ、妻や子に教えていれば止められると、そう思つたもんだから、誰にも教えねではあ、そのまま高野山に登つてしまつたど。そして刈萱と名前変えて、和尚さまになつていたど。それを風の便りに奥方聞いて、石堂丸と

いう子どもつれて、旅かさねて探して行つたど。そして高野山の麓近くまで行つたども、なれない旅なもんだから、母親は体こわして病氣になつたごんど。そうして、どうやら、宿屋さも泊らんね、路銀もなくなつたども、親切な家あつて、そこさ泊めてもらつたど。そして、

「ここから先、高野山は女人禁制で、とても治なおつても登らんね」

て教えらつたごんだど。んで、石堂丸あ、

「おっかささん、おれ行つて見て来つから、それまでに元氣になつてろよ」

て、そう言つて、石堂丸はとぼとぼと一人で登つて行つたど。高野山さ。そうして登つて行つたら、なんぼもお寺もあり、和尚さん方もいるごんだずも。んだども、一人の和尚さんを、袖おさえて、

「近頃、和尚さまになつた人で、刈萱という和尚さま知つてござんねが…」と聞いたごんだど。

「今同心の方で…」

と、こう言うたど。

「昨日剃ったも今同心、一昨日剃ったも今同心、そんなこと言うたて、分るものでないぜ」

て、こう言うごんだど。

「いや、わたしの父親は加藤左エ門資氏という名前の人であつたども、御存知ならば教えてもらいたい」

て、そう言うたど。そしたら、その和尚さま、しばらく考えてであつたども、「そんなような和尚さまだつたら、最近逝くなつたであんまいか」

「逝くなられたようだら、その墓でもええから会わせてもらいたい」

て、石堂丸はそう言うたど。そうしたら、お墓さつれでつて、まだ石塔も建たないお墓さつれで行つたど。

「これ、その方のお墓だと思ふから、よつくと拝んで帰つて、とてもあれなんだから、お母さんと家さ帰つて、お母さんに孝行して暮した方がええ、そう思う」
て、さとして、そうして帰したど。石堂丸は泣き泣き帰つたど。とぼとぼどな。そしてその刈萱も涙を袖で拭いてであつたどな。そしてどうも本当だか嘘だがつ

て言うような、疑問も持ったども、石堂丸は戻ったど。そして戻って見たら母親は死んであつたずも。そしてはあ、泊つてた家も親切な家なんだからはあ、ねんごろに葬つて呉くつであつたど。そしてそのお墓の土を一握り持たつて、また父にも会えず、母に死なれ、とてもおれも生きていらんねと、おれも和尚さまになんなねと、そう思つて石堂丸も、また高野山さ再び登つて行つたど。そうしてこんど、この前教えてもらった和尚さまを探すと思つて、一生けんめいで寺廻つて、その和尚さまを探し当てたど。そして、

「和尚さん、和尚さん、里さ出て下つてみたら、おつかさんが、とうに死んであつた。仕方ないから、土一握り持つて来たから、あの墓の傍さ埋めて、おれを弟子にして呉んねか」

て、そう言わつたど。そしたら、こんど「あまりええ」て、そこさ、やつぱり埋めて、自分の弟子みたいなことにお寺さ願つて、小僧にしてともども和尚さんになつてあつたど。そしてはあ、後では親子の名のりはしたそうだども、それまで悟りを開くまでは、他身で暮して通してあつたけど。むかしとーびん。

44 阿波の徳島十郎兵衛

むかし、阿波の国に、阿波の徳島十郎兵衛という人いだっけど。何かの罪で、国におられず、一人娘のおつるといふ、かわいい女の子も母親に頼み、遠い国の山奥で狩りをしたり、旅人を襲いお金を盗ったりして暮しただけ。

阿波の国では、おつるも十二才ばかりになって、ばばちゃんに、

「おれのおとつあんやおつかさんは、なじよになったなあやあ」

て、毎日聞くもんだから、三人でお前をばばのおれにあずけて出て行つたが、

風の便りに生きてるらしいから、お前探しに行つてみつかつて言つたど。そして、
おいずる

笈摺おいずるという巡礼の着る着物に笠とに、同行二人と書いて、それは、一人はお大師さまの陰たのみななど。それを着て笠をかむつて鈴を持ち、ばばちゃんに聞いた

親の年格好の人を探しさがして、ある山小屋のような家に来たど。そして巡礼に御報謝願いますというと、自分の心に描いた、年格好のおっかあが出てきて、

「おやまあ、こんな年波もいかぬ子が、可哀そうに…」

と思ひ、国はどこで、名は何というか、また親の名は…などと、「わが子もちようど…」このぐらいになったべなあと思うもんだから、やさしくして、腰掛けて休め、なにか食べるの、といったげんど、おつるも嬉しくなり、

「はい、国は阿波で徳島の、トトサマは十郎兵衛、ハハサマはおゆみと申します。

そのトトサマ、ハハサマにお会いしたくて、こうして探して歩くのです」

と言うたど。そのときのおゆみの驚きはもう少しで、そのハハは、このおれだと口まで出かかったが、親父どのは泥棒にまでなりさがっていることを、どうしてもこんな可愛い娘に聞かせらんないと、心に思いつい涙をぼろぼろこぼしたど。それを見て、おつるは、そんなに泣いて呉れっどこ見っど、もしやカカサマでございませんかと聞いたど。おゆみは慌てて涙を拭いて、

「いやいや、お前のおっかさまではないが、あまりかわいそうなので、つい涙が

出て、しょうがない」

と、立つて行き、お金たくさんもつてきて、「これを御報酬しますから、早く麓の村ささがり、そしてばさまの待つ阿波に帰った方がよいと思う。お前の、そんなに会いたがっていることを、親たちがどこかで聞いて、お家に帰ってるかもしれないから……」

と。親ではないかと泣くおつるを、早く親父の帰らぬうちにと、なだめすかして、送りだしてやったけど。運悪く、まだ村にでないうちに、あまり獲物もなく、テクテク帰る十郎兵衛に行きあってしまった。そして何も言わずに絞め殺し、ありだけのお金をとって、家に来て、自慢気に話した。いや、おゆみは驚いた。悲しんだり、今日の話を話して聞かせ、それは娘のおつるだといわれて、十郎兵衛もいままでも、おゆみに泥棒だけはやめてくれと、たびたび言わっただが、なかなかやめられなかった。自分の子を殺し、ようやくわるい目さめ、頭丸るめて娘や、今までの人々をともらった。むかしとーびん。

(川崎みさを)

45 首切り役人

むかしあつたけど。

都に紫の大徳寺というお寺があり、そこに賢い和尚さんで、一休さんという和尚さんいだけど。その和尚さんと大変仲よしのお侍で、お上の罪人の首切り役だった久米の平内という強いお侍がいただけど。

ある日、雪の降る日お寺さ遊びにきて、いろいろ話の末、和尚さんが、

「平内やお前も大抵にして、首切りなど止めてはどうだ。そうでないと、お前に嫌われた人のうらみがかかるぞ」

と言ったど。そしたら平内は、

「おれは何もわるくない、お上をうらむがよい。お上の命令でやってるんだから、うらむなら、お上をうらむがよい」

と言ったど。和尚さんは、

「ああ、そうかそうか」

と、さからわず、縁側に立たれ、

「平内や、あまり竹に雪が掛つて重そうだから、落してくれないか」

と頼んだ。平内は「はい」と、気易く立って庭に出て、竹の雪をはらった。

そしたら竹はピンとはね上がる時、平内の体に雪がバサツとかかつた。そしたら和尚さんが、

「どうだ平内、命令したのは、おれだが、雪をはらったお前だ。そのお前に雪が掛つたではないか」

と言つて、はじめて平内も悟り、お弟子さんになり、自分が首を切った人々のめいふくを祈り、一生を送った。むかしとーびん。

(川崎みさを)

46 岩見重太郎

むかしあるとこに、鎮守さまが、その当時の娘ば人身御供にとるどこあつたど。そしてその家さ白羽の矢立つど、どうでも上げんねねがつたごんだど。箱さ入れてはあ。そさ、むかし偉い強い侍で、岩見重太郎という人いて、その村通りかがって、庄屋さんさ泊ったど。そうしたば、

「泊めて下さい」

て言うたば、

「今夜は、とり込みだども、まずどこがさ、ほだら部屋もあんべから、泊まれ」

「どんなとり込みだ」

て聞いたば、

「実は鎮守さまさ、家の娘、このたび人身御供に上げんねねことになつてはあ、それ当ったごんだ、今までも村のうちに代り代りに上げらつだんだども、この度はうちののが、白羽の矢立つたごんだ。おらえの屋根さ」

て、こう言うごんだど。泣いて教えつずも。

「鎮守さまとあるものが、そんなはずはない。そんでは、おれ代りに箱さ入って行ってみるから、娘でなく、おれば入れる」

て、そう言うたずも。そうして今度はあ、箱さ綿帽子かぶつてはあ、娘の仕度して、入って行つたごんだど。そうして行つて箱置くど、村の若衆はビンビンと跳ねて来たど。

そして、いつでも、いま来つか、いま来つか、なじなもの来つかと思つて中で考へつたじもの。刀は短かいなもつて、そのうちにこんど、雷など鳴つて、何かドサーツと社やしろの前さ落ちたど。そうしてゐるうちに、その箱の蓋、ミリミリミリと破つて開けるものあつずもの。そうしたら夜目にもわかるような赤い顔した白いような者だずもの。

そうすつど、その喉のようなどこめがけて、手掛けようとしたとこを、突き上げたごんだど。そうすつど、キャーッという声だずもの。そして箱から飛び上がった、あちこつち突つたど。そしてまず箱さ入つて、かつねで来らこつただから、

方角も夜のことだし、よく分んねから、夜明けてからすんべと、そう思っているうちに、夜ほのぼのと明けたか、村の衆、遠くから、

「いたか、お侍、いたか」

て来たずもの、

「いた、いた」

て。そうしたば、みんな集まった。よく見たば、年経^へた狒^ヒ狒^ヒであつたど。そうしてはあ、そういう風にして、娘ば食つてだなであつたど。村の衆に大変喜ばつただけど。むかしとーびん。

(川崎みさを)

47 百子沢

百子沢というどこに、むかし、なんぼか旦那さまで、与惣左エ門という家あつ

たけど。そしてはあ、さまざま立派な道具ばかり持っていつでも、その家でも南京焼の皿、十。なんぼか大切にしまつていで、珍らしいえらいお客さま来たときばり使つてだんだど。

それ、こんど遠くの方から立派な珍らしいお客来たから、その皿出してきて、今夜使つて、そして何御馳走したんだか、その皿使つて、そしておまかないして、奥さまは休んだじし、後しまいに、お花て言う、氣立てのやさしい娘来て、手伝つていたなはあ、なじよなか、手はずして、一つこわしてしまつたけど。そしてお花はそれ、こんど氣の毒がつて、拾そろつてたのな、こんど買ひ代えて、こんな皿は買わんね、ここの家の宝皿、おれ割つてしまつて申訳ない、何として申訳したらええんだかと思うども、ええこと考えらんねではあ、その家になんぼか大きな深い池、上手にあつたなだど。そこさ沈んで死んでしまつたなだど。そんで晚げ、「二つ、二つ、三つ、四つ……八つ、九つ」て勘定して、一つ足んねもんだから、「ええーん」と泣く声すつずもの。毎晩げ、毎晩げ。それ長く続いたど。そしてばそのうちに、何だかその池は段々育つて、沼になつてしまつてはあ、その家建つ

ていらんねぐなつて、そしてはあ、その家は引越してしまつたじし、そしてこんどは、その沼は育るおがばりだど。沼にはさまさま名前あつて、柄杓ずれの沼なても、なんぼか山の奥にある風だし、その「お花」の死んだ沢は、百子沢でも一番大きな沼になつて、そしていっぱい沼あるせい、か、「百子沢」て言うど。

(高橋しのぶ)

48 酒田の本間さま

(1)

むかしから、あんな大旦那さまでなかつたのだど。朝げ早く起きて川杭拾ひに行つたごんだど。そうしたところが、何か川杭さ引つかかつていたものあつずもの。なんだべと思つて、杭さ引掛つていたものあるし見たらば、縞の財布のよう

なものだずも。それから拾い上げてみたらば、ずっしり重たいずなだもの。そうして開けてみたらば、お金いっぱい入っていたずもの。これは何者落したか、流したか知しやねえど思つて、時の代官所さ届けたごんだど。そして落した、無くしたという者近所にいねがつたずもの。そして、

「お前は朝起きの、さずかりもんだから、お前にやる。落し主ないから……」
て、もらったために、その百両の金で、ほうぼうの荒れた田地を起すやら、買い集めるやらして、酒田の本間さまは、あれだけの身代になったなだど。どーびん。

(川崎みさを)

(2)

むかしあつたど。酒田の本間さまは、自分の持ち田を廻るに一週間もかかるこ

とであつたど。テクテク、小作やら、何やら見廻りに歩くに、あるとき、廻つて行つて茶屋で休んでいたど。そしたば、西行袋みたいな、肩さかついだ人も来て休んだごんだずも。そして、

「どこまで行く」

て聞いたど。そしたば、

「おれは石屋で旅歩つていんなだ」

て、こう言うたど。

「ほんでは、おれあ、石垣ちいと直したいどこあるから、あの、おら家さ行つて呉ろ、おれあ今日、二日くらい帰んねがら」

て、そう言うずもの。

「まず休んでろ」

て。そう言わつて、袋さげて行つたもんだど。そしてこんど玄關さ行つて、

「おれは、こっちの家の旦那の友だちだから…」

なてはあ、大きなこと言うて、入つて行つたど。そういうもんだからはあ、

「大事な金、いっぱい入ったなだから、大事にしまっておけ」

石屋なもんだから、金には相違ないごでな。この番頭衆はしまったど。その袋。そしてこんどは、

「金持っていつど、これ泥棒でも恐つかなくて、こんな仕度して歩る^あっていんなだべ、この旦那さまは……」

と、こう思つたど。そして座敷さ上げて、

「まず何御馳走したらええべ、旦那さま」

「おれは江戸から来たなだ、湯豆腐でもして来い」

湯豆腐なんて、その酒田のあたりでは知しやねがつたど。そうして据風呂さ豆腐切つて入つて沸かしたごんだど。そして、

「さあ、まず湯豆腐出たから、入つておくらえ」て言う。

「何語っていんなだ。湯豆腐さあ、鍋で煮て、醤油つけて、酒の肴に食うもんだて教えたど。」

「いやいや、おれあまた湯豆腐なんていう、風呂の中さ入れるもんだかと思つて

風呂いっぱい豆腐入れておいた」

て、そう言うずも。そして寝て、職人なんだし、朝げ早く起きたど。したば、そこの番頭さんも早く起きて、一番番頭が、

「お客さま、お目ざめだか」

て、座敷の外で言うずもの。

「ああ、目覚めつだぜ」て言うど、

「今、米、港さついた、いっぱいお買いになりませんか」
て、こう言うたど。

「なんだ、この旦那さま、米の一杯ばり買えなて、米の一杯ばり買わねば食^かんねなだべか」

こう思つたど。

「一杯でも二杯でも買つておけ」

て、こう言うたど。そうしたば、番頭の言うのは船一杯であつたのだど。それ知しやねで、「一杯でも二杯でも買つておけ」て、こう言うたごんだど。そう言う

もんだから、番頭は二杯買ったごんだど。そうしてよっぽど経もよったら、

「旦那さま、なんだか値ええから、売ったらどういうもんだ」

て、夕方になったら言うずも。

「ええようにしろ」

て、こう言うたど。そうしたら、その番頭は売ったつて。こんど、お金、盆さ山のように積んで、

「お客さまの利益は、これだけであつた」

て、持つて来たど。さあ魂消てしまったずものな。それからこんど、馬鹿でもなかつた人だごでな。なんぼ石屋でも、『はあ、船一杯であつた』と悟つたずも。そうすれば、

「小遣いにしろ」

なて、わしづかみにして、ちいと呉くつで、

「さあ、これは旦那の来ないうちに逃げんなねもんだ」

と、こう思つて、それ攫つてはあ、氣付かんねうちに逃げねねと思つて、番頭

に、

「ちよつと用達しに行つてくるから、御主人帰つたら、よろしく言うて行つたつて、こ^う言うて呉^ろ」

その金あ、こんど、風呂敷かりて包んではあ、逃げてしまつたど。そして近江の国というところまで逃げて行つて、酒屋を始めたもんだど。そしてトントン拍子に仕事もうまく行つて、こんど立派な身成りして、酒田の、あのとのおかげだと、お札に行つて来^こねねもんだと、ステッキなどついで来たごんだど。

「旦那さま、おれ、あのと^のときの石屋だ。泊つて、これこれであつて、お金をもうけてもらつて、それを資本にして、おれは近江で今で酒屋して、近江の酒屋つて言^えば、おれだ」

て、こ^う言うて札言^うたど。

「よく来て呉^つだ」

て、その晩げ泊めたど。そして朝げ、暇乞いして帰^んべと思つたど。そうしたば、上り台さ西行袋ちゃんと出してで呉^つだど。

「これが、あの時の、あなたの忘れもんだ」

て、本間の御主人に言われたど。したらこんど、

「ああ、悪がった、おごり長じ掛ってであつたと氣いついたわけだ、ありがたく
戴いて帰る」

て、そしてその人は、袋立派な服装の上き、かつねて帰つたど。

そして一生、その袋を教訓として、身代なくさないで、ますます旦那さまになつてあつたけど。むかしとーびん。

(川崎みさを)

まりつき唄

(1)

バタバタつきの　かくしここでござれ

さあつけ　さあつけ

負けんな　負けんな

つきくらに負けんな

負けた奴は飯炊き^{しい}盲^めつこのオカタ

勝った奴は長者の娘

(2)

バタバタつきの　かくしここでござれ

さあつけ　さあつけ

おっそでさ　さむらいの衆は

お手にからまり　おてだかどん

洒落たかどん

どんどとおしやらばどの神さまか

裏の小山の百里もどん　千里もどん

ひーや　ふう

みーや　よう

いっつが　むう

ななつが　やあ

ここのつ　とう

とーとせ

尊いお山の鐘が鳴る

おっそでさ さむらい衆は

(繰返し)

子守唄

子守こは楽なようで

つらいもんだな

雨風吹くとき

他人^{ひと}の軒場に立ち寄れば

やかましいから

そっちや行げと

叱られる

よーい よい

あとがき

武田 正

小国町大石沢の高橋しのぶ・川崎みさをの両氏の昔話をお聞きするのは、これ
で三度目である。昭和四十一年の夏、奥村幸雄先生と民俗調査のために、そして
今年、昭和四十五年一月には大川悦生先生、小河内芳子先生を案内して、山形県
立図書館の川部敏男氏と共に、豪雪の中を訪れ、小国町総合開発センターや町役
場の方々の温かい援助で成功したのでした。そしてまた七月末に奥村先生と再び
訪れたものである。高橋・川崎両氏がすぐれた語り手であり、しかも互いに隣家
の間柄であり、その上で高橋氏は女系の昔話を多く保存される代表的語り手であ
るのに対して、川崎氏は早く母を失って、父に育てられ、子守りなどをして苦労
を重ねられた間に、父からと、奉公先で聞いたりしたものもを保存されている点で、
まさしく父系の昔話の語り手となったといつてよい。

高橋氏は明治三十五年生まれで、五人兄弟の三人目であり、実家を継いでいる

姉さんと共に語り手としてすばらしい。主に祖母から聞いたものであるという。

川崎氏の場合は明治四十二年に生まれたが、大抵は父親から聞いたものであるが、「天保物語」は奉公先の市野々の藤兵衛という人から、「人柱の話」はお針の師匠から、「菅原道真」も針師匠からといい、この地方でお針の師匠の果した役割の一端を知ることができる。また、友だちと「語りくら」などをしたものというし、父親も他家に子をつれて入ったということで、教訓話をしてくれたと述べられている点から、川崎氏の語り口の軽やかさと高橋氏のゆっくりした語り口は、きわめて貴重な存在であると思われる。

なお伝説も加えたのは、伝承の中で大石沢では昔話と共に語られているので、今後の研究の分野として伝説と昔話が語り手や受け手にどう区別され、区別されなかったかを考える参考としてのせた。

この小国町昔話集・第二集のために労をとって下さった高橋家・川崎家の方々に感謝申し上げます。

この集も、奥村幸雄氏の多大の御援助ででき上った。本来は共著であるべきであることをおことわりし、深く感謝申し上げる次第である。

さとりのお化け

小国町昔話集（二）

昭和45年8月15日

編者 武田 正

（南陽市三間通
232の3）

山形短期大学民話研究センター資料叢書

さとりのお化け

小国昔話集 二

*本書は、ガリ版刷りで作成された原本を活字化したものです。

平成二十年六月三十日

山形短期大学民話研究センター

〒九九〇―二三二六

山形市片谷地五一五

山形短期大学附属図書館内

(電話)〇二三―六八八―七五四四

山形短期大学民話研究センター資料叢書 既刊（再刊順）

- 『西川町の昔話』（一九七五年九月発行、二〇〇六年三月再刊）
- 『むかしあつたけど』（一九七五年二月発行、二〇〇六年三月再刊）
- 『米沢市築沢の昔話』（一九七二年十一月発行、二〇〇六年三月再刊）
- 『米沢市塩井の昔話』（一九七三年十一月発行、二〇〇六年三月再刊）
- 『安楽城の伝承（一）』（一九八四年四月発行、二〇〇六年三月再刊）
- 『安楽城の伝承（二）』（一九八五年四月発行、二〇〇六年六月再刊）
- 『安楽城の伝承（三）』（一九八五年十月発行、二〇〇六年六月再刊）
- 『高畠町和田の昔話』（一九七九年八月発行、二〇〇六年七月再刊）
- 『及位の昔話（一）』（一九八〇年八月発行、二〇〇六年七月再刊）
- 『及位の昔話（四）』（一九八〇年十二月発行、二〇〇六年十月再刊）
- 『及位の昔話（五）』（一九八一年二月発行、二〇〇六年十月再刊）
- 『佐兵ばなし』（一九七一年一月発行、二〇〇七年四月再刊）
- 『まま子いじめ 米沢市六郷・宮井の昔話（一）』（一九七四年四月発行、二〇〇七年四月再刊）
- 『かつぱの硯 長井市・米沢市六郷の昔話』（一九七四年七月発行、二〇〇七年四月再刊）

- 『行けざんざん 小国町昔話集』(一九七六年九月発行、二〇〇七年四月再刊)
- 『お婆の手ん箱(一) 阿部キヌオさんの語り』(一九七七年四月発行、二〇〇七年七月再刊)
- 『及位の昔話(二)』(一九八〇年九月発行、二〇〇七年七月再刊)
- 『及位の昔話(三)』(一九八〇年十月発行、二〇〇七年七月再刊)
- 『牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第一集』(一九六八年三月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『続牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第二集』(一九六八年十月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『続々牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第三集』(一九六九年一月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『牛方と山姥(四) 海老名ちやう昔話 第四集』(一九六九年四月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『飯豊町昔話集 — 大平・新沼・高畑 —』(一九七一年九月発行、二〇〇八年四月再刊)
- 『蛇むこむかし しらたかの民話』(一九六六年二月発行、二〇〇八年四月再刊)
- 『お杉お玉 小国町昔話集(一)』(一九七〇年二月発行、二〇〇八年六月再刊)
- 『さとりのお化け 小国町昔話集(二)』(一九七〇年八月発行、二〇〇八年六月再刊)
- 『鬼と豆のくいくら 小国町昔話集(三)』(一九七〇年十月、二〇〇八年六月再刊)